

平成3年 台風19号災害に伴う埋蔵文化財発掘調査

早田遺跡

—福岡県糸島郡二丈町大字波呂所在遺跡の調査報告—

二丈町文化財調査報告書 第18集

1997

二丈町教育委員会



平成3年 台風19号災害に伴う埋蔵文化財発掘調査

早 田 遺 跡

—福岡県糸島郡二丈町大字波呂所在遺跡の調査報告—

二丈町文化財調査報告書 第18集

1997

二丈町教育委員会

序

二丈町は人口13,000人の農業を基幹産業としている町であります。しかしながら、ほ場整備事業前の現況は、農道が狭く、用排水路も狭少なために慢性の排水不良が生じています。また、近代の大形農業機械が導入できないほどの不整形なほ場区画のために、農業所得の伸び悩みが最大の問題となっていました。こうした中、昭和61年度より県営ほ場整備事業一貴山地区がスタートしましたが、平成4年度に完了する間には、大坪遺跡（墳墓群や水田遺構）、辰ヶ下遺跡（墳墓と遺物包含層）などの貴重な埋蔵文化財が確認される事となり、この地が、古来より重要な地域であった事が再認識されました。また、本書に収録している早田遺跡については、台風という天災による発見であったものの、復旧工事前にスピーディーに記録調査ができた事は幸いであったと思います。今後、こうした記録の蓄積が、糸島地区のみならず我国の考古学研究の一助になり、文化財保護思想の育成になれば幸甚に存じます。

二丈町教育委員会

教育長 吉村昌幸

例　　言

1. 本書は、福岡県糸島郡二丈町大字波呂字早田に所在する埋蔵文化財の調査報告書である。
2. 遺跡は、平成3年9月の台風19号通過後の土砂崩壊により発見されたため、緊急調査として、平成3年9月25日～27日にかけて発掘を実施した。
3. 遺構の実測ならびに写真撮影は、古川が行った。
4. 出土遺物の実測ならびに製図は、山本の協力を得て、古川が行った。
5. 本書の編集は古川が行った。

本　文　目　次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の位置と環境	3
1. ほ場整備事業内の埋蔵文化財文化財	3
2. 位置と環境	7
III. 調査の記録	9
1. 概　要	9
2. 遺構と遺物	9
3. 包含層と遺物	11
IV. 大早田地区の試掘	25
V. おわりに	26
1. まとめ	26
2. おわりに	26

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図 (S=1/25,000)	2
第2図	県営ほ場整備事業一貴山地区事業範囲と発掘調査地点 (S=1/2,000)	5
第3図	周辺地形図 (S=1/2,500)	8
第4図	柱穴実測図 (S=1/40)	9
第5図	溝状遺構実測図 (S=1/30)	10
第6図	遺構出土遺物実測図 (S=1/3)	11
第7図	北側土層実測図 (S=1/50)	11
第8図	包含層出土遺物実測図-1 (S=1/3)	13
第9図	包含層出土遺物実測図-2 (S=1/3)	14
第10図	包含層出土遺物実測図-3 (S=1/3)	14
第11図	包含層出土遺物実測図-4 (S=1/3)	15
第12図	包含層出土遺物実測図-5 (S=1/3)	16
第13図	包含層出土遺物実測図-6 (S=1/3)	17
第14図	包含層出土遺物実測図-7 (S=1/2)	18
第15図	包含層出土遺物実測図-8 (S=1/3)	20
第16図	包含層出土遺物実測図-9 (S=1/3)	21
第17図	包含層出土遺物実測図-10 (S=1/3)	22
第18図	包含層出土遺物実測図-11 (S=1/3)	22
第20図	出土遺物実測図 (S=1/3)	25
第21図	周辺地形図 (S=1/2,500)	25
遺跡全体図	(S=1/80)	折り込み

Fig-1	大坪遺跡I全景	3
Fig-2	大坪遺跡I出土戸板	3
Fig-3	辰ヶ下遺跡甕棺検出状況	4
Fig-4	大坪遺跡II溝状遺構検出状況	6
Fig-5	大坪遺跡II水田遺構検出状況	6
Fig-6	阿難尊者立像 (波呂 竜国寺蔵)	7

表-1	県営ほ場整備事業「一貴山地区」に係る調査遺跡	4
表-2	出土土器法量	24

写 真 図 版

- 図版-1 a 調査前（崩壊面）
b 同 上（近景）
- 図版-2 a 遺物出土状況
b 同 上（乗り面 下）
- 図版-3 a 遺跡全景（調査後・南側より）
b 同 上（調査後・北側より）
- 図版-4 a 北側土層
b 同 上（近景）
- 図版-5 出土遺物-1
- 図版-6 出土遺物-2
- 図版-7 出土遺物-3
- 図版-8 出土遺物-4

I. はじめに

1. 調査に至る経過

県営ほ場整備事業一貴山地区は、平成2年度をもって、その面工事が終了し、農業用貯水池の建設を残すのみとなっていた。しかしながら、平成3年9月、北部九州に多大なるダメージを与えた台風19号により、波呂地区の一部の乗り面が崩壊し、災害復旧作業が緊急に検討される事となった。こうした中、同地が貯水池予定地の近隣という事もあって福岡県福岡農林事務所の職員が現地を視察し、乗り面下の弥生土器を発見して、その土器を二丈町役場農政課へ運び込んだ事が契機となって遺跡の発見へつながったものである。数日後に農政課よりの打診を受けた二丈町教育委員会は現地を視察し、この時点で、未だ多くの弥生土器が乗り面下に露出している事を確認した。教育委員会としては完形土器を含む大半の土器の依存状況が良好なため、発掘調査の必要性があると判断し、福岡農林事務所、町農政課、との協議を持つ運びとなった。協議では、突発的な状況とは言え、緊急を要する災害復旧と文化財保護との立場で意見の食い違いが生じたものの、結果的には発掘調査を実施する事で落ち着き、要調査面積を考慮して直ちに調査にかかる事で意見の一致をみた。

2. 調査の組織

発掘調査ならびに報告書刊行に従事した組織の構成は以下に記すとおりである。

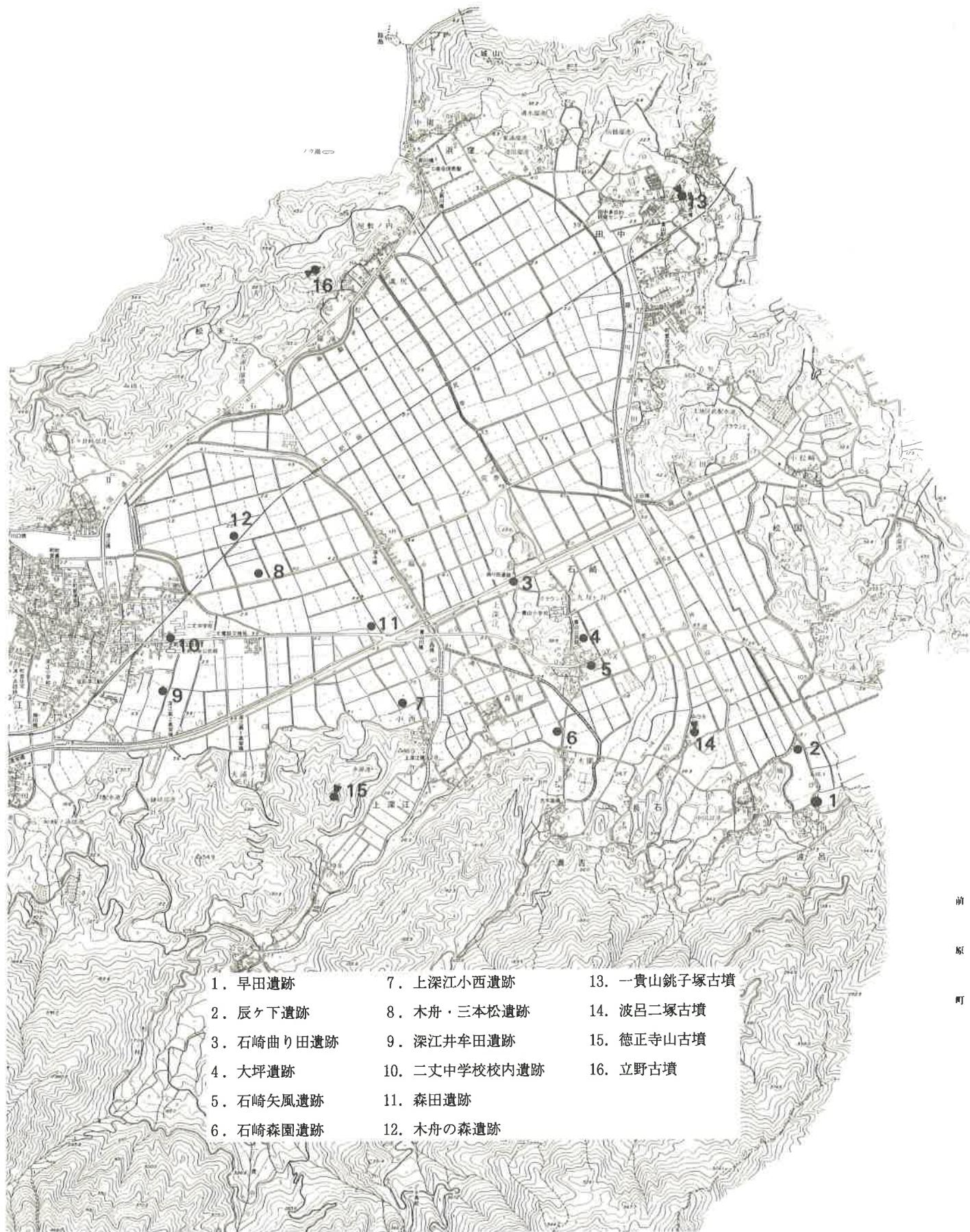
発掘調査（平成3年度）

調査主体	二丈町教育委員会	
総括	教育長	吉村昌幸
	教育課課長	庄島正
庶務	同和教育係長	宮崎晶之
	社会教育係長	松崎栄三
調査	教育課主事	古川秀幸

報告書刊行（平成8年度）

調査主体	二丈町教育委員会	
総括	教育長	吉村昌幸
	教育課課長	空閑俊明
	教育課課長補佐	清水泰次
庶務	社会教育係長	瀬戸利三
調査	教育課主事	古川秀幸

調査・整理作業にあたっては、地元在住の関係者各位にご協力を得た。末尾ながら記して感謝の意を表します。



第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)

II. 遺跡の位置と環境

1. 一貴山地区遺跡群（ほ場整備事業内の埋蔵文化財）

県営ほ場整備事業一貴山地区は、二丈町の北東部にあたり、南側から南東側にかけては脊振山系の山々が迫る。事業地内は準用河川羅漢川左岸に拓けた沖積平野であり、地形は、標高2m～20mの高さがあり、南北方向へ1/450程度傾斜している。

ほ場整備事業開始にあたり、町教育委員会としては、福岡県教育事務所より職員を派遣して頂き、初年度に当たる昭和60年度に着手された田中地区の事業と同時に埋蔵文化財の確認調査を開始した。こうした中、昭和63年度には、松国地区の確認調査、引き続き、事業地内の中心でもある石崎地区



Fig-1 大坪遺跡I全景

(fig-1) の確認調査がなされ、石崎地区の広い範囲で弥生時代早期～前期にわたる甕棺墓群 (fig-2)、旧河川などが検出されている。同年、切り盛り調整により全掘は避けたものの大坪遺跡として発掘調査が実施されている。この調査では、弥生前期の住居跡、甕棺墓23基、貯蔵穴、旧河川の左岸から伸びる杭列群などが出土している。中でも13号甕棺墓の底板に転用されていた戸板については、現在までのところ我が国最古例となり注目される遺物と言える。

平成元年度は面工事最終年度にあたる。町教育委員会においても文化財専門職員1名を採用し、波呂地区の確認調査を実施した。同地区は、面工事内の最南端に位置

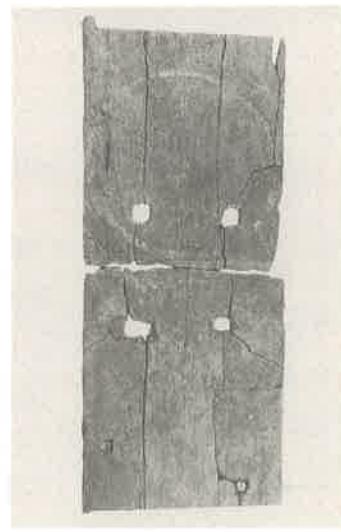


Fig-2 大坪遺跡I出土戸板

し、遺跡の存在の可能性が高い地点と言えた。また、周辺においては、以前に弥生中期の甕棺墓が出土しており、波呂第1号遺跡、第2号遺跡として周知の文化財包蔵地として認められていたため、同遺跡に最も近い、大字辰ヶ下の確認調査に重点を置いた。結果的には弥生中期中頃の甕棺墓1基と同時期の遺物包含層が確認され、石崎地区同様切り盛り調整により全掘は避けて、甕棺墓 (fig-3) の調査のみを実施している。同時に行った字塚田については、遺構、遺物など確認されなかった。

平成2年度については、貯水池建設予定地に当たる波呂字大早田地区の試掘調査を実施した。遺物としては、弥生中期初頭～中頃の土器が出土したもの、遺構面の確認はできなかった。

平成3年度については石崎貯水池の確認調査を実施した。同地については、昭和63年度に行われており、柱材が出土していたが、建設地が変更されたのを受けての、再度の確認調査となった。結果的には、遺構面の確認はできずに、弥生前期の土器の細片が出土したのみである。

この年については、北部九州に多大なる被害をもたらした台風17号、19号が上陸した年であり、土砂崩壊後の早田遺跡（本書報告分）の発見があり、発掘調査を実施している。遺跡の発見、本調査への経緯については、前項のとおりであり、結果的には、弥生後期～平安時代の遺物包含層を中心とする遺跡であった。しかしながら、包含層中には墨書き土器、印を押した土器など見るべき遺物があり、波呂地区の重要性が明かになったと調査と言える。波呂地区の歴史的背景については、後述しているが、後の室町期に幕府との強いつながりを持つ事となる竜国寺の存在を考えても同遺跡の重要性が考えられる。

平成4年度については、石崎地区貯水池の調査を実施した。この年については、平成3年度に調査済みであったものの、最終的には本調査を行う運びとなった。調査までの顛末については、大坪

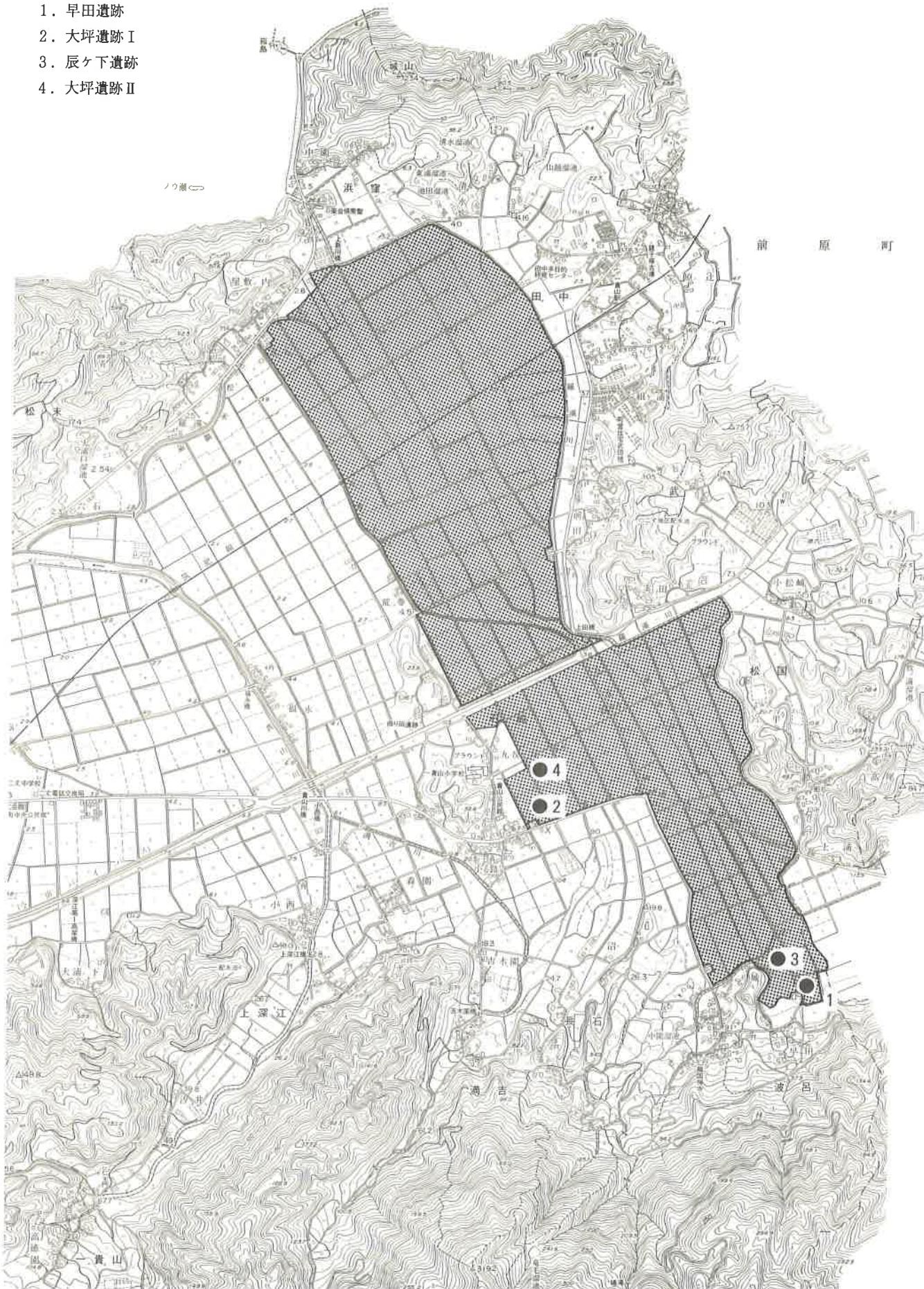


Fig-3 辰ヶ下遺跡甕棺検出状況

番号	遺跡名	概要	調査年度	備考
1	大早田遺跡	弥生中期の遺物包含層	平成2年度	今回報告
1	早田遺跡	平安の掘立柱建物 弥生～平安の遺物包含層	平成3年度	今回報告
2	大坪遺跡I	弥生早期～前期の甕棺墓群 旧河川、堰、土壌	昭和63年度	「大坪遺跡I」 1994
3	辰ヶ下遺跡	弥生中期の甕棺墓	平成元年度	「曲り田周辺遺跡I」 1991
4	大坪遺跡II	弥生早期～中期の水田、溝 弥生前期の甕棺墓	平成4年度	「大坪遺跡II」 1995

表-1 県営ほ場整備事業「一貴山地区」に係る調査遺跡

1. 早田遺跡
2. 大坪遺跡 I
3. 辰ヶ下遺跡
4. 大坪遺跡 II



第2図 県営ほ場整備事業一貴山地区事業範囲と発掘調査地点 (S=1/2,000)

遺跡Ⅱ（二丈町文化財報告書第13集）に記載しているとおりであるが、糸島地区地区における初の弥生水田の確認となった。

大坪遺跡は、昭和63年度調査地の北側にある。地形は南側より続く低台地で、西側の石崎丘陵との間に谷が入る。検出された遺構は、台地上を走る幅2.7m、深さ0.7mを測る溝状遺構（fig-3）が中心で、この溝を取り入れ口とする水田、2時期分（弥生早期、中期）が出土している。また、溝内には多数の弥生土器や木製農工具が出土し、井堰状遺構も検出されている。水田面については、弥生中期の水田面より杭、矢板列、足跡などが検出されたが、畦は確認できていない。また、早期の面（fig-4）については、幅15cm程の畦に区画された長方形区画の水田が検出された。部分的に畦が流されているため、全容は解明できないが、概ね、 $20m^2 \sim 30m^2$ の規模の水田が検出されている。また、畦については、側板が杭によりしっかりと固定されており、弥生早期の水田技術がかなり高い水準であった事が裏付けられた調査となった。

石崎地区については、昭和54年に曲り田遺跡の調査がなされ、稻作開始期の竪穴住居跡30軒が出土していた。しかし、水田面は確認されておらず、課題のひとつでもあったが、大坪での水田の検出により、同地区が板付、菜畑遺跡同様の状況を呈している事は確実と言え、依存状況は両遺跡よりも良好である可能性は極めて高い。また、遺物の中には縄文後期、晩期のものも多く、稻作開始期がさらに上がる可能性もある。いずれにせよ、今後、指定などの問題も念頭に置き、調査していかなければならないと考えている。



Fig-4 大坪遺跡Ⅱ溝状遺構検出状況



Fig-5 大坪遺跡Ⅱ水田遺構検出状況

2. 波呂地区の歴史的背景。

早田遺跡が立地する波呂地区は、脊振山系の山々の裾野にあたり、一貴山地区の平野部を見下ろす標高57mの高所と言える。弥生時代の遺跡としては、宅地造成工事により弥生中期中頃の甕棺墓1基が出土、波呂第1号遺跡として周知化されていた。また、農業関連により、やはり、中期の甕棺が出土し、辰ヶ下遺跡として周知の遺跡となっていたが、同遺跡については、は場整備事業により甕棺墓1基が新に調査される事となり、近隣に墓域が広っている可能性は極めて高い。

古墳時代の遺跡としては、町内で4基しか確認されていない前方後円墳のひとつである二塚古墳がある。二塚古墳は本格的な発掘は実施されてなく、調査としては、糸島高校歴史部によって測量がなされているらしいが、その記録も紛失している。当時の記述によると全長50m、後円部径23m、後円部高さ6m、前方部幅26m、高さ6mとなっており、古墳時代後期との見解である。この時期については判断しかねるが、現状を踏査した結果、規模的には間違いないと言えよう。

上記のように古代の遺跡についても少なくはないが、波呂地区が歴史的に脚光を浴びるのは、鎌倉時代からで、竜国寺の建立をもってからだと言える。この時代は、平家の滅亡前後であり、糸島一円の豪族、原田氏と平家の深い関係から二丈町でも混乱していた時代と言える。こうした中、同寺は建仁三年（1203年）に智玄和尚によって、平重盛の菩提を弔うために開山されている。（施主は原田種直）当初は法相宗であり、小松山「極楽寺」と号していたようであるが、後に原田氏の菩提寺として再興され、萬藏山「竜国寺」となり、同時に曹洞宗に改められて現在に至っている。この寺が広く知られるようになったのは、昭和42年の本堂改修の折り阿難尊者立像（県指定・fig-6）が発見されてからと言える。この像は、内剃りのある桧の一本造りで、素地に生漆を塗った後に胡粉で彩色が施されている。また、胎内には阿難尊者という像名と共に「至徳元年（1380年）十月五日」との墨書きがあり、室町初期の作と確認されている。この事は、竜国寺の記録にある、寺の再興の折り、將軍、足利義政が阿難尊者立像を寄進されたとの記述と合致し、足利幕府との強いつながりを示す貴重な像と言える。また、室町後、江戸時代になっても寺勢は強く、中津領の時代には、住職交替の都度、領主に謁見している事が記録に見られ、同寺が特別な存在であった事が伺える。



Fig-6 阿難尊者立像（波呂 竜国寺蔵）

- | | | | | |
|------|--------------|------------------|-----------|------|
| 参考文献 | 『曲り田周辺遺跡Ⅰ』 | 二丈町文化財調査報告書 第4集 | 二丈町教育委員会 | 1991 |
| | 『大坪遺跡Ⅰ』 | 二丈町文化財調査報告書 第10集 | 二丈町教育委員会 | 1995 |
| | 『大坪遺跡Ⅱ』 | 二丈町文化財調査報告書 第11集 | 二丈町教育委員会 | 1995 |
| | 『二丈町誌』 | | 二丈町誌編集委員会 | 1967 |
| | 『二丈町史跡の道しるべ』 | | 二丈町教育委員会 | |

III. 調査の記録

1. 概要

前述のとおり、遺跡発見は台風災害による土砂崩壊によるため、調査面積は復旧工事分の面積で実施した。現況は、東側斜面の2段からなる畠地で、そこから一段低い水田面へと続く。土砂崩壊はその2段目より起きており、崩壊面、水田部にかなりの土器が露出していた。復旧工事としては、崩壊面に沿って乗り面を付けるとの設計であり、残存している2段目の遺構検出と亀裂部分からの包含層調査、トレンチを設定しての水田部の遺構確認を行った。

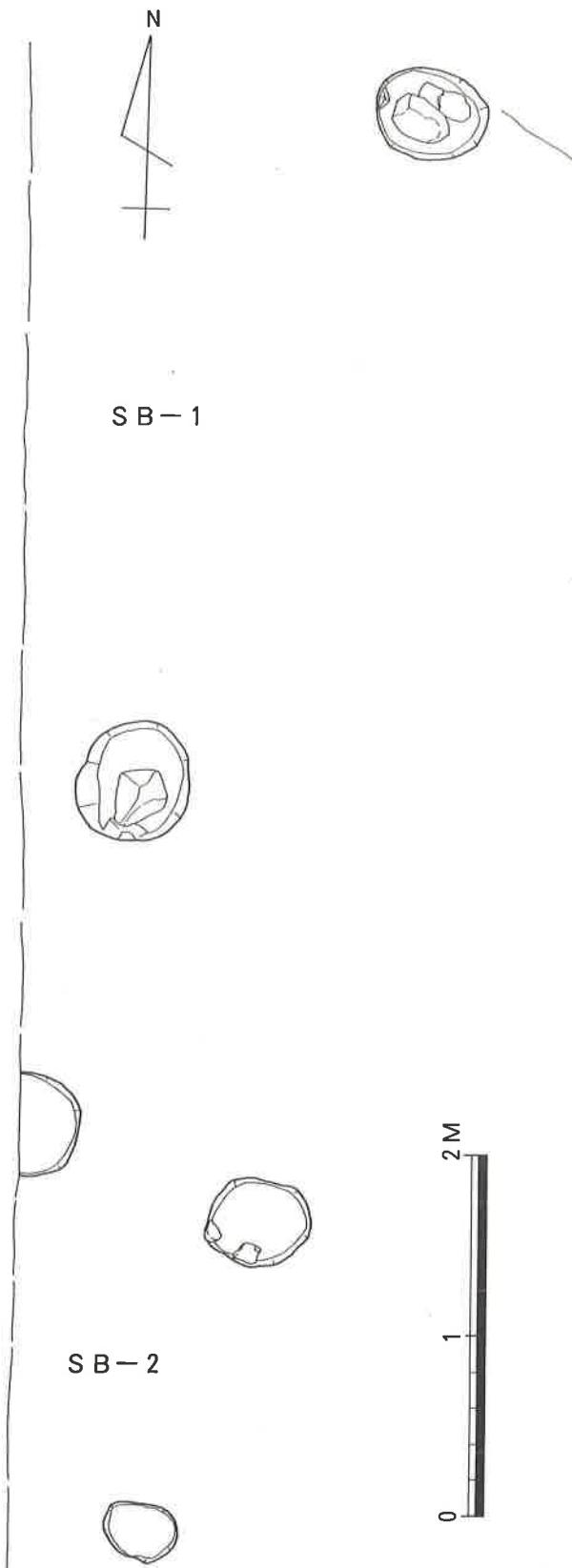
結果的には掘立柱建物2棟分の可能性がある柱穴状ピット5、溝状遺構1が検出されたが、水田部では遺構が確認されず、包含層の調査に重点をおいた。

2. 遺構と遺物

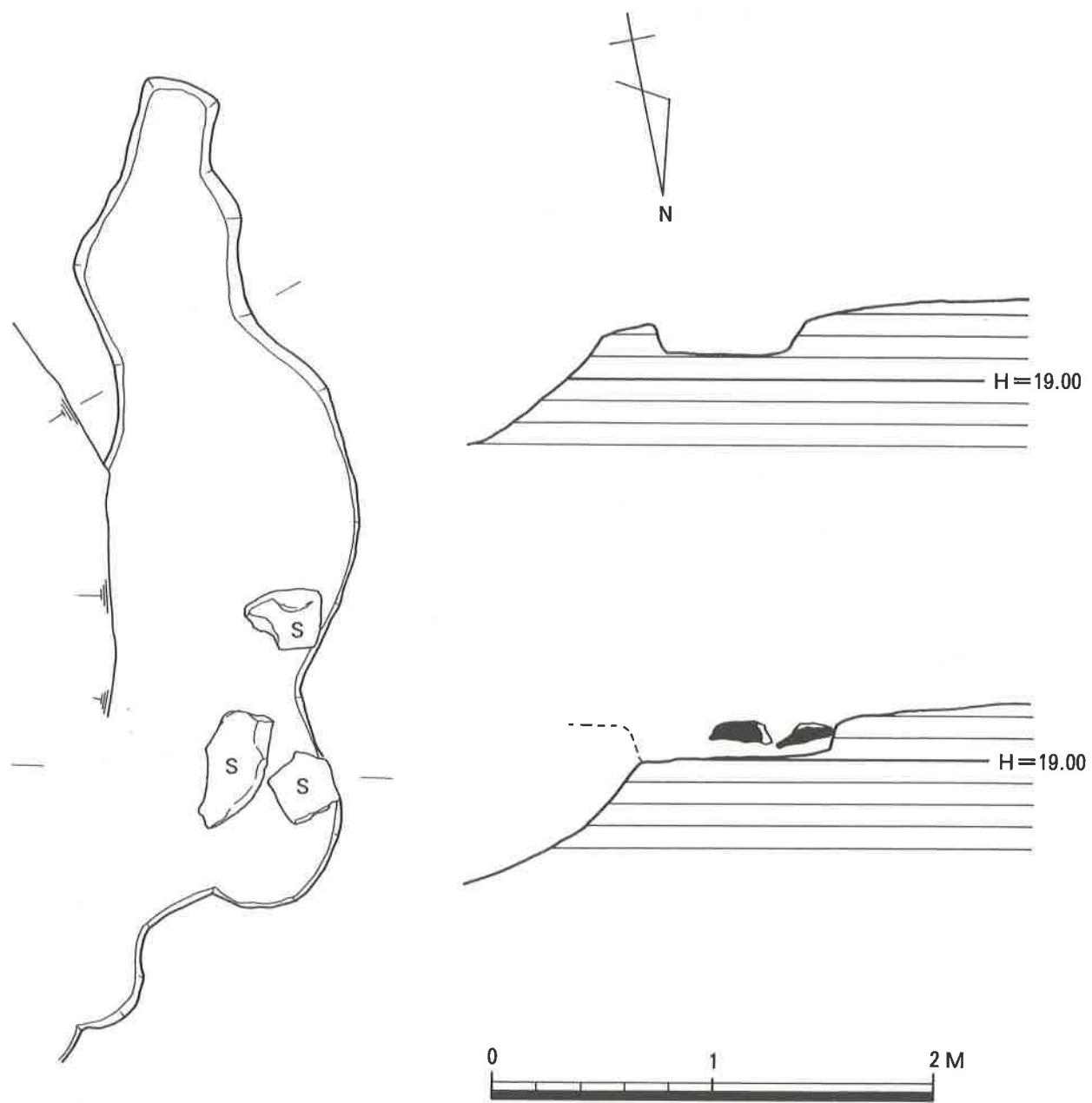
SB-1 2段目のテラス面で検出した建物跡である。大半は調査区外となるため、全容は確認できないが、柱間は400cmを測る。また、P-1、P-2共に根石の考えられる石が検出され、ピット内より平安期の枕底部が出土している。

SB-2 SB-1の南側に隣接している建物跡である。やはり、大半は調査区外となるため、全容は確認できないが、柱間は160cmを測る。P-4より平安期の土器片が出土したが、図化に耐えない。SB-1と同時期であろう。

SD-1 SB-2の東側で検出された溝状遺構である。幅約110cm、深さ10cmを測り、mの長さで検出したが、崩壊面の方へ続くため、全容は不明である。人頭大の石3個が出土したが、用途は不明であり、また、一部が過熱により変色している石器や桃の種2個が出土し



第4図 柱穴実測図 (S=1/40)



第5図 溝状遺構実測図 (S=1/30)

ている。建物に付属する可能性もあるが、性格は不明である。時期も確定できない。

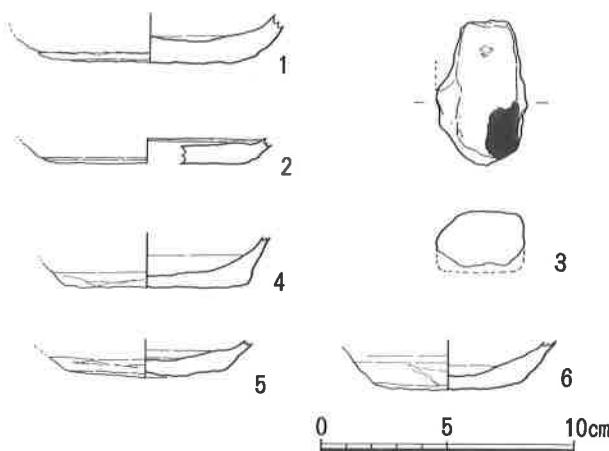
SB-1 出土土器 (第6図)

1、2はP-1より出土した椀底部片である。1は底部と体部の境に明瞭な線が入るもので、器壁が厚い。内底がやや黒変している。色調は暗茶色、微砂粒を若干含み、焼成は良である。底部径7.4cmを測る。2は1に比べ、平らに成型された底部を持ち、体部も直線的である。また、底部に

比べて体部の器壁が薄い。色調は黄白色、砂粒を若干含み、焼成はやや不良である。底部径8.0cmを測る。

SD-1出土土器（第6図）

3はSD-1出土の石器である。砥石かとも考えたが、用途については不明である。一部分黒変している。長軸5.2cm、短軸3.6cm、厚さ2.1cmを測る。砂岩製。



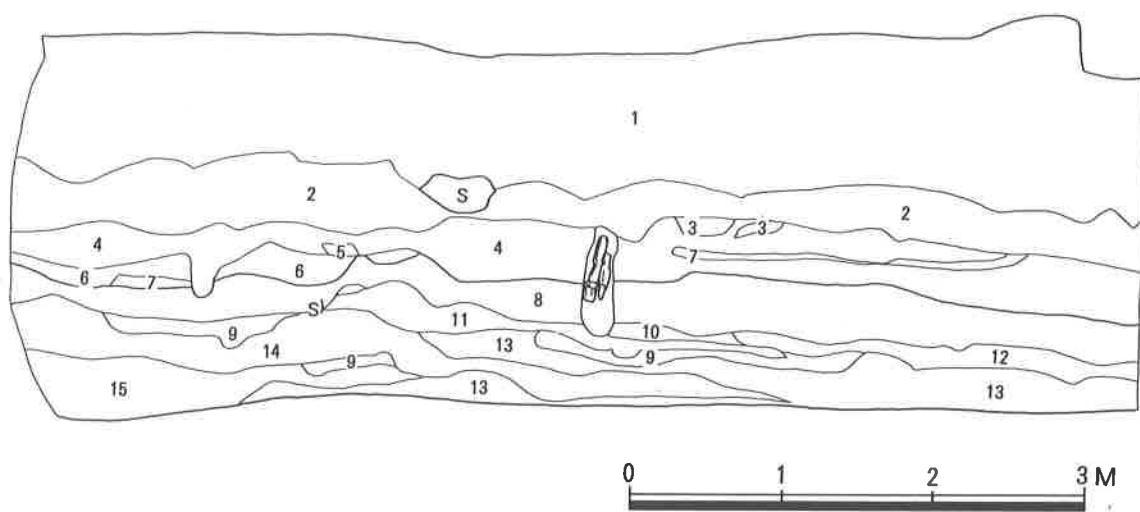
第6図 遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

3. 包含層と遺物（第7図）

調査区北側部分で、完全に崩壊している崖面を使って、土の堆積状況を確認した。後述している包含層出土の土器の大半はこの崖面より崩落したものである。

土層は1、2とした耕作土と同床土が厚く、続いて4とした磁器と平安期の遺物を若干含む黒色

21.00M



- | | | |
|----------------------|----------------|------------------------|
| 1. 耕作土(黒茶色土) | 6. 青白色粘質土 | 11. 黄緑色砂質土(粗い) |
| 2. 床土(暗青灰色砂質土) | 7. 緑色粘質土(3より明) | 12. 黒色土(炭化物含む) |
| 3. 緑色粘質土 | 8. 黒茶色土 | 13. 黒色粘質土(砂含む) |
| 4. 黒色土(平安期の遺物・炭化物含む) | 9. 青灰色粘質土 | 14. 砂土(土器含む) |
| 5. 赤茶色土(鉄物含む) | 10. 黄緑色砂質土(細い) | 15. 黒色粘質土(弥生～古墳期の遺物含む) |

第7図 北側土層実測図 (S=1/50)

土が続く。この面より、杭が打ち込まれているのが確認されたが、時期は不明である。近世であろうか。次ぎに7とした砂礫を含む黄色粘質土が確認されるが、この層には平安期の土器が多く含まれている。この層直下の8、9、10としている青灰色～黄緑色を呈す砂質土が南側の遺構面に対応するものである。最後に13とした青灰色砂礫土、14の黒色粘質土が現れるが、この層には弥生時代後期～古墳時代初頭までの遺物が多く含まれており、谷部に露出していた土器の大半が、7と13、14のものである事が確認された。崩壊面上の一段目の畠、また、その上の水田部に遺構が続くのであろう。

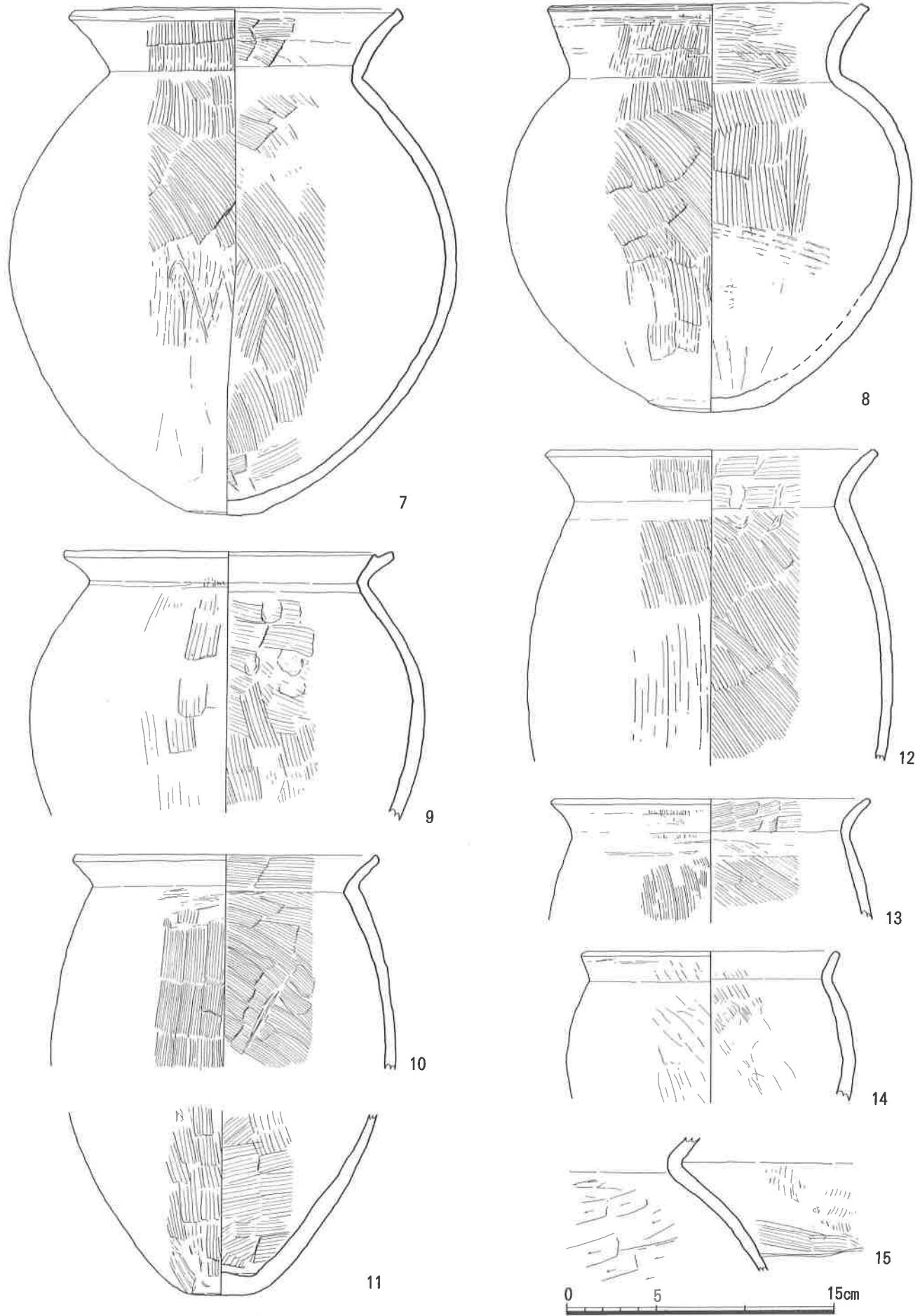
土層内の土器（第6図）

4は黒色土（4）、5、6は黄色粘質土（7）出土のものである。4は底部より直線的に伸びる体部を持つ。胎土には金雲母を含み、暗褐色を呈す。底径7.4cmを測る。5、6は底部がやや不安定で、丸みを持って体部へ続くものである。5は微砂粒を若干含み、褐色を呈す。底径6.2cmを測る。6は砂粒を若干含み、明褐色を呈す。底径5.8cmを測る。

包含層出土弥生・古墳期の遺物（第8図～第14図）

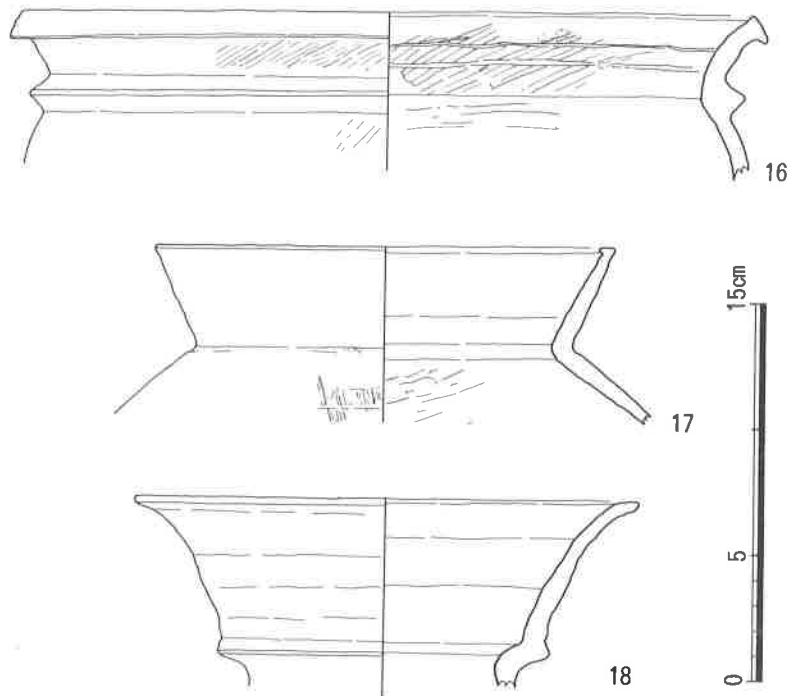
崩壊面下の谷部に露出していた土器であり、青灰色砂礫土（13）、黒色粘質（14）からの出土であろう。計測値などは19頁以下の表にまとめた。以下、順次説明を加えたい。

7～18は甕形土器である。7は卵形の胴部を持つ甕であり、頸部のしまりは強い。底部にはわずかに平底の感じが残る。内外面ハケ調整であるが、外面胴下半は板ナデ状に粗いハケメが残る。色調は淡茶色で、焼成は良好である。弥生終末期であろう。8は丸みが強い胴部に未だ平底の感じが残るレンズ底を有す。頸部のしまりは弱い。内外面ハケ調整であるが、内面下半はナデ消しを施す。明褐色を呈す。時期は弥生後期後半でも終末期に近いものであろう。7、8共にほぼ完形に近く、遺跡発見の契機となった土器である。9は丸みをおびた胴部に小さめの口縁部が付く。内外面ハケ調整であるが、外面は後にナデを施す。色調は淡黄白色。10は長胴形のものであり、内外面細かいハケ調整を施す。色調は黒茶色である。11は甕底部。不明瞭な稜線が入るレンズ底で、全体的に肉厚である。内外面ハケ調整を施し、色調は外面暗黄白色、内面暗茶色を呈す。12は長胴形のもので、しまりのない頸部から口縁部へ至る。内外面ハケ調整であるが、外面胴下半は板ナデ状に粗いハケメが残る。色調は黄褐色。13はしまりのない頸部から小さめの口縁部が付くもので、器壁は比較的薄い。内外面ハケ調整であるが、口縁部～頸部にかけてナデ調整を加える。色調は淡黒茶色を呈す。14は小型の甕である。頸部のしまりはなく、胴部から口縁部にかけては直線的である。内外面ハケ調整後ナデ調整を施す。色調は乳白色を呈し、焼成はやや不良である。15は頸部のしまりが強いもので、外面ハケ調整と板状工具によるナデ。内面ケズリを施す。胴部外面に沈線が入る。色調は黄褐色。16は頸部に三角凸帯を持つもので、口縁端部は外側に折り曲げ、面を持たせている。また、口縁内側に2条の沈線を巡らす。内外面ハケ調整を施し、色調は黄白色を呈す。17は頸部のしまりが強く、口縁端部を内側につまみ出すもので、所謂「布留式」の甕である。外面板ナデ後ナデ、内面ケズリを施す。色調は明黄褐色。18は二重口縁の甕で、屈曲部から上外方へ外反する口縁部を有す。内外面強いナデ調整を施す。色調は暗黄白色。10、11は弥生後期後半、14、15、17、18は古墳時代初頭、他は弥生終末期と考えられる。

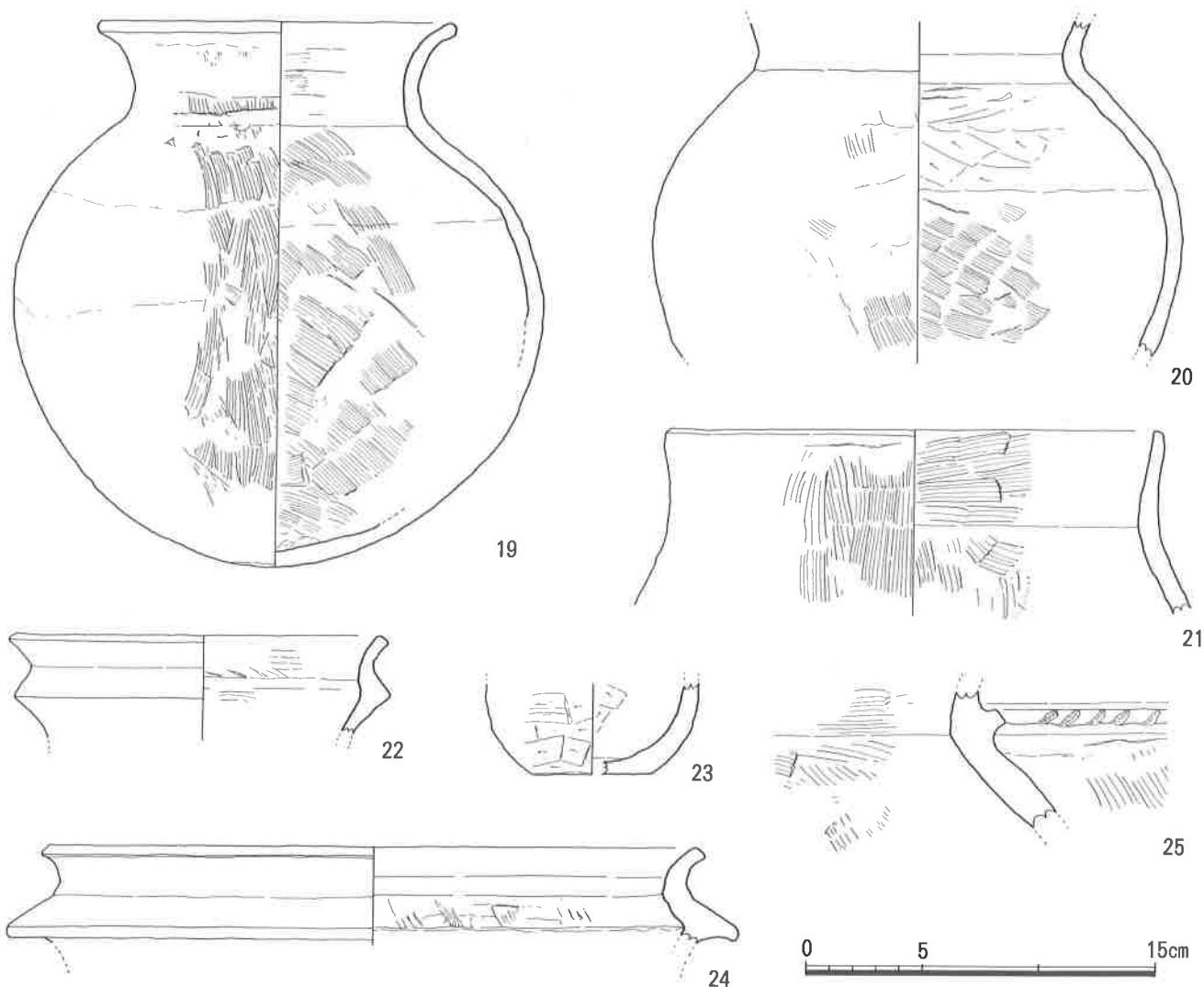


第8図 包含層出土遺物実測図-1 (S=1/3)

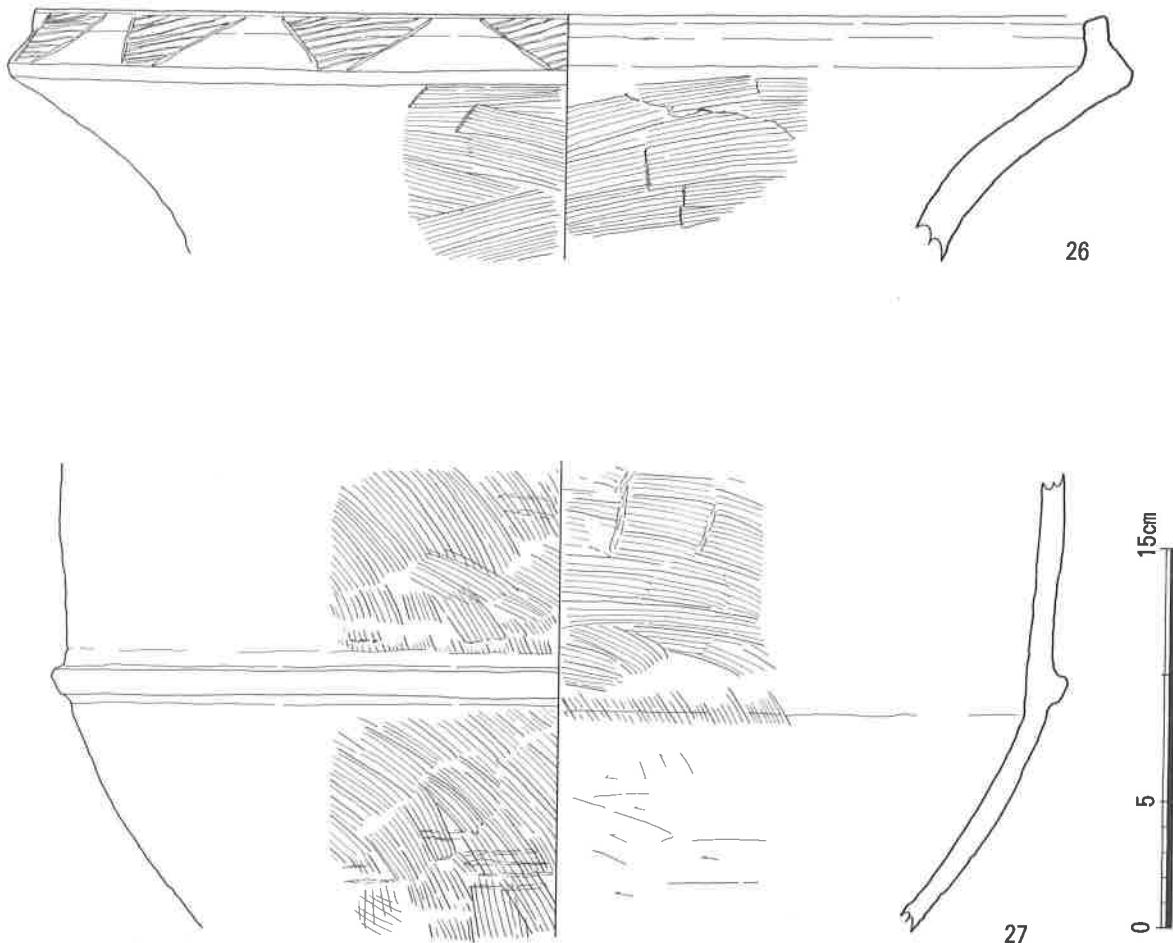
19～22は壺形土器である。
19は広口の壺であり、胴部
は球形を呈す。底部は丸底
であるが、僅かに稜線が入
る。また、外面に粘土の継
ぎ目が明瞭に観察できる。
調整は細かいハケ調整で、
頸部以上と底部付近はナデ
消しを施す。20は傾きに確
証はないが、ほぼ同様のも
のであろう。共に色調は淡
褐色。21は頸部のしまりの
ない直口壺で、内外面ハケ
調整を施す。色調は黒茶色。
22、24は複合口縁壺である。



第9図 包含層出土遺物実測図－2 (S=1/3)



第10図 包含層出土遺物実測図－3 (S=1/3)



第11図 包含層出土遺物実測図－4 (S=1/3)

22は小型のもので、屈曲度が強い。外面丁寧なナデ調整を施し、内面はハケ調整後ナデを施す。色調は淡褐色。24は大型のもので、屈曲度は弱く一段目は垂れ気味である。外面丁寧なナデ調整を施し、内面はハケ調整後ナデを施す。色調は明褐色であるが、外面は丹を塗る。23は小型のもので、鉢の可能性もある。底部は平底で、内外面板ナデを施す。色調は褐色～黒茶色を呈す。25は器壁が厚くやや大型の土器で、甕の可能性もある。頸部にコの字状の凸帯を巡らし、ヘラ工具による刻み目を入れる。内外面ハケ調整で色調は褐色である。

25、26は大型土器である。広口の大型壺であり、口縁上部より内傾して真上へ立ち上がる。また、口縁端部にヘラ状工具による山形の連続文を描き、外側にはハケメ状態の装飾を施す。内外面ハケ調整。色調は明褐色である。26は大型土器の胴部下半片で、一条のコの字凸帯を持つ。甕であろうか。外面叩きの後ハケ調整、内面はハケ調整で、下部に板ナデを施す。色調は明褐色。共に弥生終末期であろう。

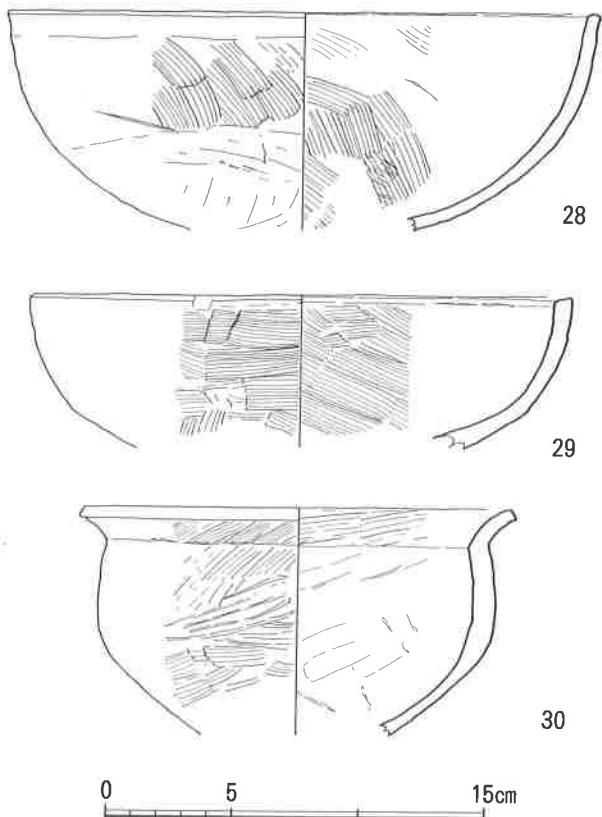
28、29は椀形土器、30は鉢形土器である。28はやや大振りの椀で、半球状の体部から口縁部へ至る。また、口縁端部は平坦に仕上げている。調整は基本的にハケ調整であるが、体部下半にケズリを施す。色調は黄褐色。29は28より器高の低いもので、口縁端部をやや内傾気味に仕上げる。内外

面ハケ調整で、色調は褐色である。30は胸部下半より急に窄まるもので、頸部の屈曲度も弱い。外面粗いハケ調整、内面板ナデを施す。色調は褐色～黄白色を呈す。28は弥生後期後半、その他は弥生終末期と言えよう。

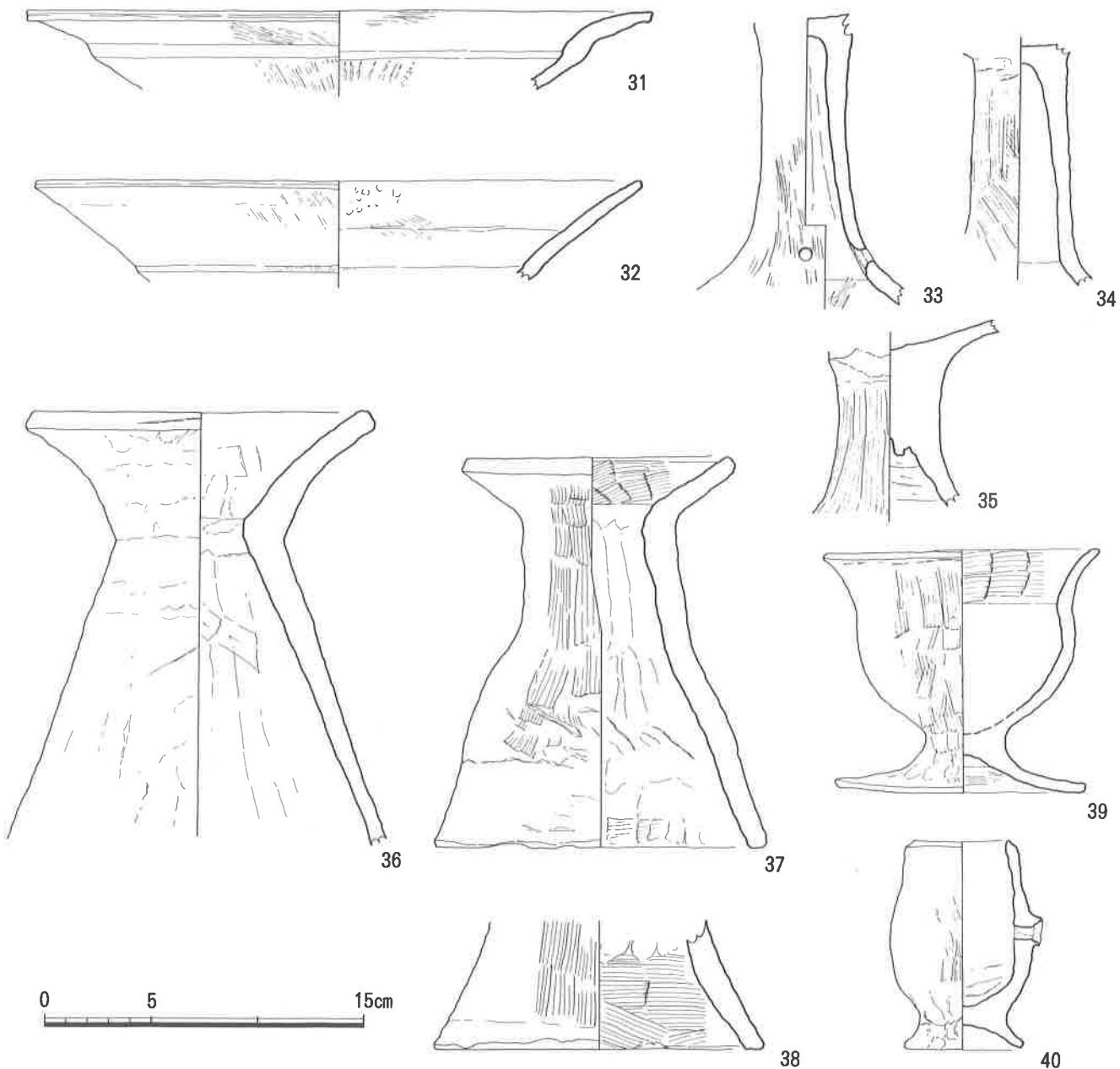
31～35は高壺形土器である。31は体部の2/3程から強く屈曲するもので、調整はハケとミガキである。また、内面には暗文状にミガキを入れる。色調は暗褐色である。32は胸部中位より屈曲するもので、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面共にハケ後ナデ調整で、内面には指頭圧痕が顕著に残る。色調は褐色。33は高壺脚部で、柱状部から脚裾にかけてのカーブは緩やかである。不明瞭である。また、脚部と脚裾の境付近に孔を穿つ。外面はハケ調整、内面下部にはミガキを施し、棒状工具による絞り痕が顕著に観察できる。色調は黄褐色であるが、外面丹塗りである。34は棒状の脚部で、脚裾へは明瞭に屈曲する。外面ハケ調整。内面棒状工具による絞り痕が観察できる。色調は褐色である。35は短脚のものである。器壁も比較的厚く、脚部内面の整形も雑である。外面ハケ調整、内面ケズリを施す。色調は淡褐色。時期については、33は弥生後期前半、31、34は後期中頃、32は終末期、35は終末期～古墳初頭の時期であろう。

36～38は器台形土器である。36は受け部が大きく、全体的にやや大ぶりである。また、頸部のしまりは緩く、脚裾部までが直線的に開いている。調整は内外面板状工具で成形し、外面は丁寧にナデ仕上げを行っている。受け部外面に指頭圧痕が観察できる。色調は暗茶色である。37は受け部が小さいもので、ほぼ完形である。受け部以下は直線的で、脚部中位より内湾気味に開く。全体的に雑な作りの感じを受ける。内外面ハケ調整で、脚裾部には叩きの痕跡が観察できる。また、内面上位に棒状工具によるしづり痕がある。色調は淡褐色である。38は脚裾部のみ破片資料であるが、直線的に開くものであろう。内外面ハケ調整を施し、色調は明褐色である。時期については、36は後期中頃代、38は後期後半、37は終末期～古墳時代初頭と考えている。

39、40は脚台付きの土器である。39は台付き甕で、低く、小さめの脚台に頸部のしまりのない甕が付く。外面は粗いハケ調整、内面口縁部ハケ、体部は丁寧なナデ調整である。また、脚部には指頭圧痕が残る。色調は褐色である。40は台付き注口土器で、器種は長胴の無頸壺である。全体的に



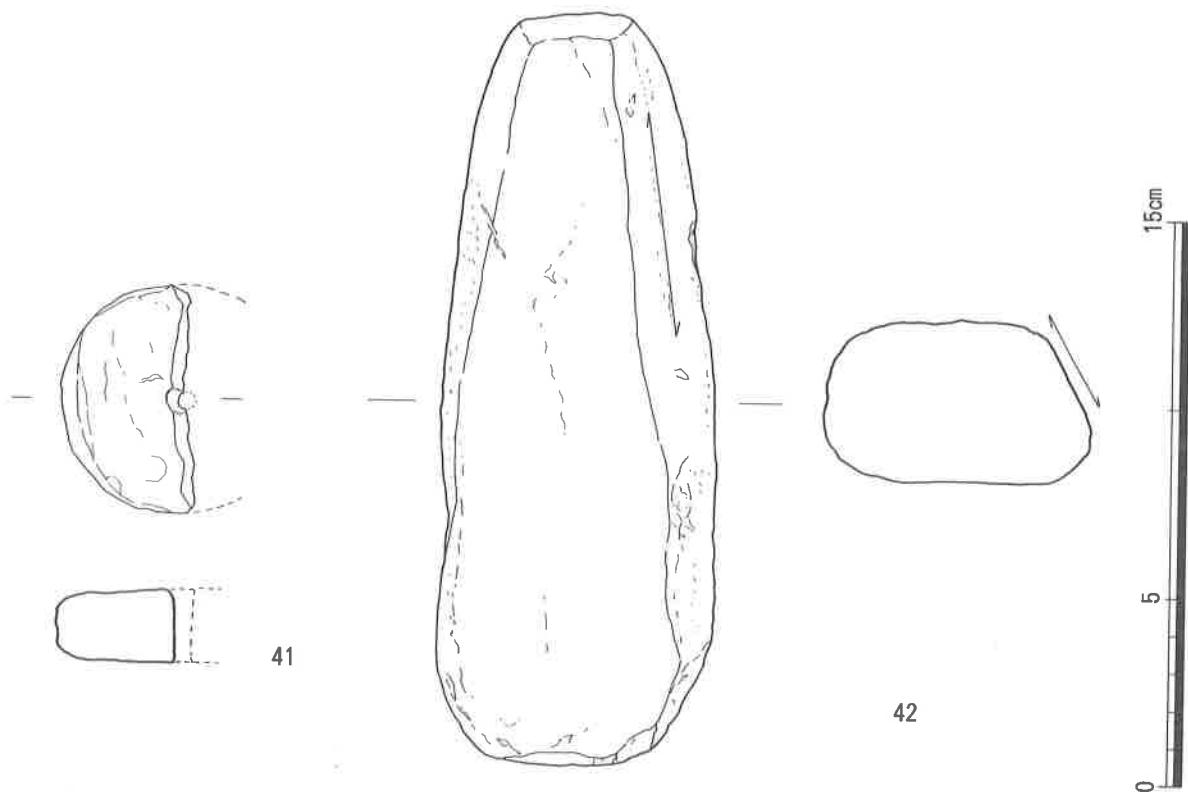
第12図 包含層出土遺物実測図-5 (S=1/3)



第13図 包含層出土遺物実測図-6 (S=1/3)

手捏ね状の感じを受ける。低い脚台に卵形の胴部が付き、胴上位は直線的に立ち上がる。胴部中位に10mmの孔を穿つ注口を付す。外面ハケ調整後ナデ。脚部はナデにより手捏ね状となる。また、内面は基本的にナデ調整であるが、下部はヘラ状工具により雑に搔き上げている。色調は黄白色を呈す。時期については、39は弥生後期後半～終末期、40については確証はないが、概ね弥生終末期と考えている。

41は土製紡錘車である。厚みのあるタイプのものであり、表裏とも丁寧にナデを加える。直径6cm、厚さ1.9cmを測る。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は淡褐色である。弥生後期後半代の時期であろう。



第14図 包含層出土遺物実測図－7 (S=1/2)

42は長さ17.8cm、幅7.3cm、厚さ4.2cmを測る石器で、石斧と考えている。側面が磨かれており、一部黒変している。玄武岩製。時期については不明である。

小 結

包含層より出土した弥生～古墳時代の土器群の主体は、弥生後期後半～終末期である。壺形土器の形態的を見ると頸部のしまりが強く、底部についても未だ平底の感じを残すレンズ底と言える。また、調整技法的には、胴下半をケズリとまで行かないものの、板状工具によりナデつけているのが認められ、終末期前後の特徴が窺える。壺形土器についても広口壺や直口壺、複合口縁壺などと様々なバリエーションがあり、後期後半以後の特徴とも言える器種の多様化が認められる。このような出土土器は、質、量共に良好であると言え、調査面積の狭さを考えてても同地に弥生後期の集落が存在する可能性を考えるべきであろう。近辺の弥生後期の遺跡を考えてみたいが、早田遺跡の東には、前原市の東遺跡群（集落や方形周溝墓が出土）、本田孝田遺跡（大溝などが出土）などがあり、西には広形銅鉢の鋳型が出土した曲り田周辺遺跡、終末期の壺棺墓群（糸島高校郷土資料館蔵）が確認されている長石地区、楽浪系漢式土器や小形の銅劍が出土した深江地区の井牟田遺跡などがある。これらが、当時の拠点集落と考えられるが、こうした大集落に囲まれた中で、どのような位置を占めている遺跡かを考えるには、時期尚早であるが、すぐに隣接する丘陵上に立地する長石地区との関連は十分に想定でき、今後、同地での住居跡などの確認に期待をしたい。

器種名	土器番号	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	備考
土師椀	1	(2.0)		7.0	暗茶色	微砂粒若干含む	良	
土師椀	2	(1.1)		7.3	黄白色	微砂粒若干含む	やや不良	反転
石器	3							
土師椀	4	(2.1)		7.3	暗褐色	金雲母含む	良好	
土師椀	5	(1.5)		6.3	褐色	微砂粒若干含む	良好	
土師椀	6	(2.0)		5.8	明褐色	微砂若干含む	良	
甕	7	28.8	18.3	4.3	淡茶色	微砂粒多く含む	良好	
甕	8	23.0	17.4	5.7	明褐色	微砂粒若干含む	良好	
甕	9	(15.4)	18.7		淡黄白色	微砂粒多し	やや不良	反転
甕	10	(12.2)	17.0		黒茶色	微砂粒若干含む	良	反転
甕	11	(10.4)		2.8	暗黄白色 内面暗茶色	微砂粒含む	良好	反転
甕	12	(17.8)	18.3		黄褐色	微砂粒若干含む	良好	反転
甕	13	(6.9)	17.7		淡黒茶色	微砂粒多し	良好	反転
甕	14	(8.5)	14.1		乳白色	砂粒多し	やや不良	反転
甕	15	(7.6)			黄褐色	砂粒多し	良	
甕	16	(6.6)	29.0		黄白色	微砂粒若干含む	良好	反転
土師器 甕	17	(7.0)	18.1		明黄褐色	微砂粒若干含む 精選粘土	良好	反転
甕	18	(7.4)	19.8		暗黄白色	砂粒若干含む	良好	反転
壺	19	23.5	15.0	1.7	淡褐色	砂粒含む	良好	
壺	20	(14.5)			淡褐色	砂粒多し	良	反転
壺	21	(8.0)	20.8		黒茶色	微砂粒若干含む	良	反転
壺	22	(4.3)	15.5		淡褐色	微砂粒含む	良好	反転
鉢	23	(4.0)		5.2	褐色~黒茶色	砂粒多し	やや不良	反転
壺	24	(4.1)	27.7		明褐色	微砂粒若干含む	良好	反転
壺	25	(6.0)			褐色	砂粒多し	良好	
甕	26	(9.7)	42.5		明褐色	砂粒若干含む	良好	反転
甕	27	(18.3)			明褐色	微砂粒含む	良	反転
椀	28	(8.7)	23.0		黄褐色	砂粒多し	良好	
椀	29	(6.0)	21.1		褐色	砂粒多し	良好	反転
鉢	30	(9.0)	16.9		褐色~黄白色	微砂粒多し	良好	反転
高付坏	31	(3.7)	29.5		暗褐色	微砂粒含む	良	反転
高坏	32	(4.7)	28.5		褐色	微砂粒若干含む	良	反転
高坏	33	(13.8)			黄褐色 (外面 丹塗り)	砂粒多し	良好	三方に穿孔
高坏	34	(11.4)			褐色	微砂粒若干含む	良好	
高坏	35	(9.2)			淡褐色	砂粒多し	良好	
器台	36	(20.5)	15.8		暗茶色	微砂粒多く含む	良	反転
器台	37	18.5	12.3	15.3	淡褐色	砂粒含む	良	
器台	38	(6.0)		15.3	明褐色	砂粒若干含む	良好	反転
台付甕	39	11.5	12.5	11.5	褐色	微砂粒若干含む	良好	
台付甕	40	9.8	4.4	5.4	黄白色	微砂粒多し	やや不良	
紡錘車	41				淡褐色	砂粒多し	良好	
石器	42							

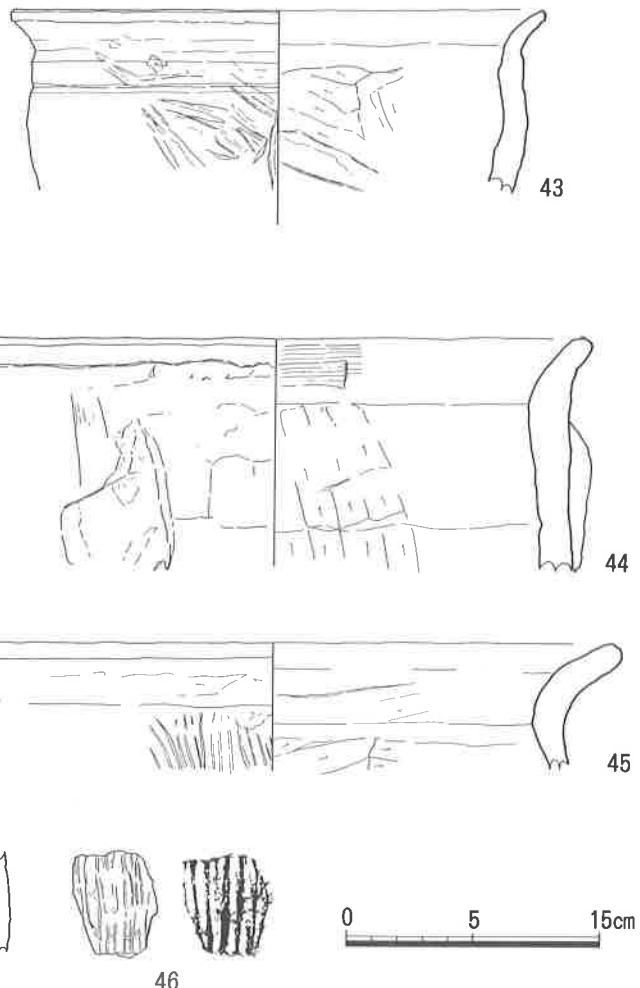
土器計測表 - 1

包含層出土平安期以降の遺物

(第15図～第18図)

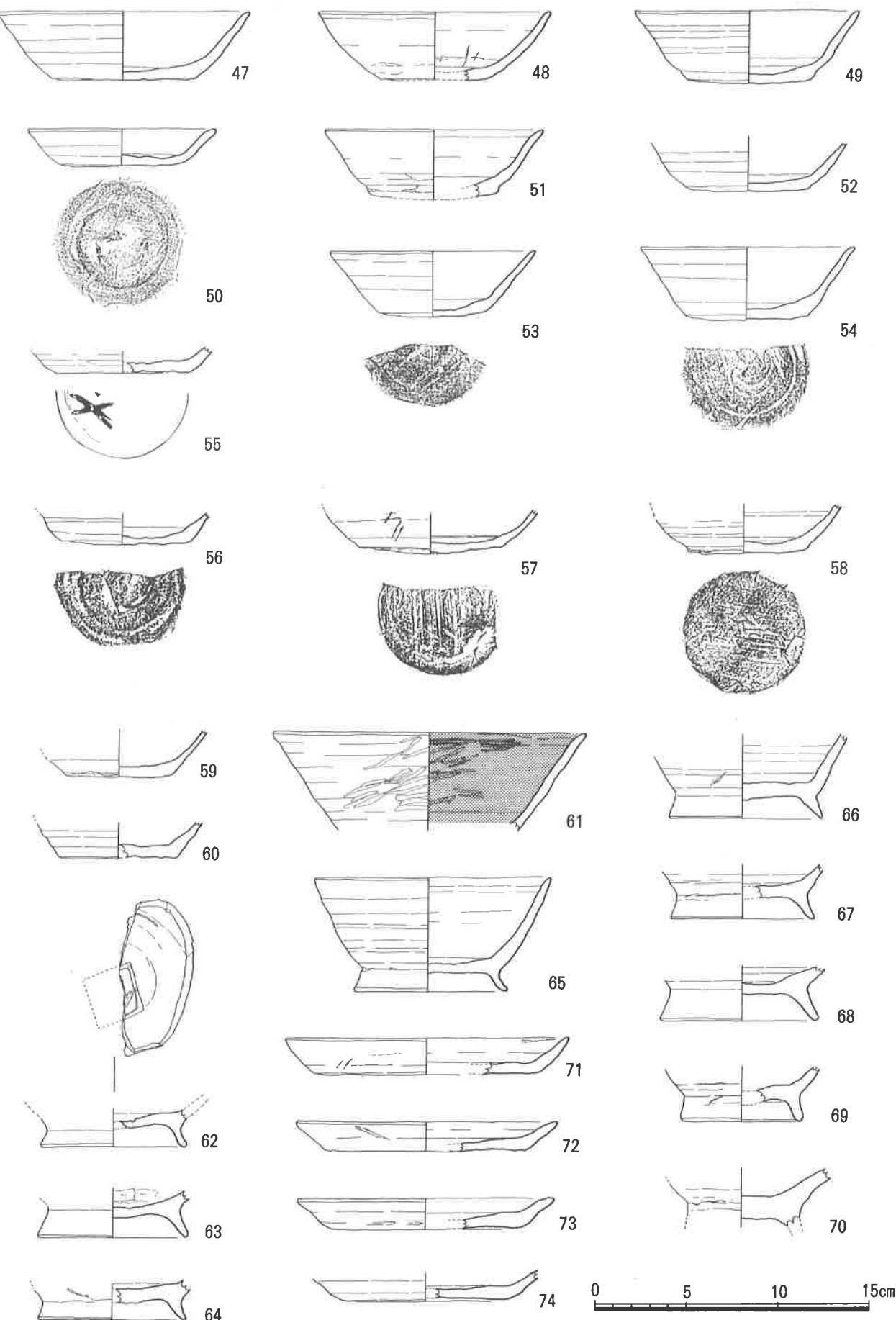
谷部上に堆積していた土器と崩壊した土を除去していた時に収拾したものである。殆どは、北側の壁で観察した黄色粘質土(7)よりの出土と考えられる。以下、順次説明を加えるが、計測値については、23頁の表にまとめた。

43～46は甕形土器である。43はしまのない頸部からやや内傾気味に直に伸びる胴部のものである。また、頸部付近から口縁部にかけては、板ナデを加えるためにやや角張った感じを受ける。外面粗いハケ調整、内面ケズリを施す。色調は外面黒色、内面褐色を呈す。44はしまのない頸部から直線的な胴部にいたるもので、口縁部が非常に小さいため、胴部の境も不明瞭である。内外面粘土の継ぎ目が顕著に観察できる。また、外面には、土器焼成前の粘土塊が付いている。破片資料で断言はできないが、底となる可能性もあり、移動式竈ととらえるべきかもしれない。調整は、基本的に外面板ナデ、内面ケズリである。色調は暗茶色。45はややしまのある頸部のもので、器壁は比較的厚い。外面粗いハケ調整、内面ケズリを施す。色調は暗茶色である。46は小形の甕の胴部片で、傾きについては確証はない。外面蕨手状の叩きを施し、内面はケズリ調整である。製塩土器の可能性がある。時期については、すべて10世紀前半代と考えている。



第15図 包含層出土遺物実測図-8 (S=1/3)

47～49、51～60は土師器碗である。47は他に比べ、やや大き目であり、体部の開きも直線的である。調整は、外面ヨコナデ、内面ナデである。色調は明茶褐色。48は体部にやや丸みをもつ。内外面ヨコナデを施し、内底に工具の痕跡が残る。色調は明褐色である。49は底部への境が強調されている。調整は内外面ヨコナデであるかせ、外面のナデが強く、稜線が多く入る。色調は暗茶褐色。51も同様なタイプであるが、ヨコナデ具合が弱い。色調は褐色である。52は口縁部を欠損するが、上記に近いものであろう。底部への境はあまり強調されていない。色調は茶褐色。53、54はやや小ぶりのタイプのものである。体部は直線的に開き、底部にはヘラ切り離しの痕跡が顕著に残る。内



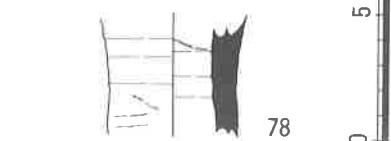
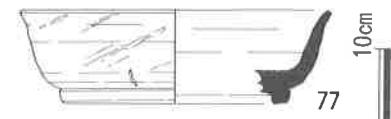
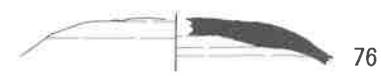
第16図 包含層出土遺物実測図-9 (S=1/3)

外面ヨコナデ。色調は茶褐色である。55は墨書き土器である。さらに小ぶりのタイプで、調整は内外面ヨコナデである。底部に「X」のような墨書きが確認されるが、破片のため、判読できない。色調は明褐色である。56は体部下位から急に開くもの。底部にはヘラ切り離しの痕跡が顕著に残る。色調は茶褐色。57はやや大ぶりのものであろう。調整は内外面ヨコナデであり、外面に工具痕が残る。底部にヘラ切り離しの痕跡が残る。色調は黄褐色。58は49に近い。内外面ヨコナデで、底部にはヘラ切り離しの痕跡が残る。色調は明茶褐色である。59、60は小ぶりなタイプであり、調整はヨコナデ。色調は共に茶褐色である。時期については、47は9世紀初め～中葉、48、49、51、54は9世紀中葉～後葉、53は10世紀代と考えている。

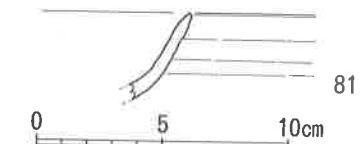
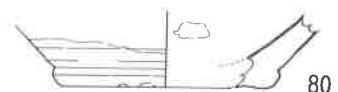
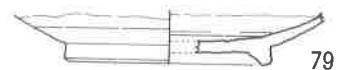
61～70は土師器高台付碗である。61は内黒土器であり、体部以下を欠損するが、低めの高台が付くものであろう。体部は直線的に開き、調整はヨコナデ。内外面ヘラミガキを施す。色調は、外面明褐色、内面黒色である。62は底部と高台のみの破片資料である。高台は低く、外に開く。内底に中心から若干ずれて方形の印を押したと考えられる窪みが認められる。印字については、判読できない。63、64も低めの高台を有すもの。65は低めの高台にやや丸みをもつ体部が付く。内外面ヨコナデである。色調は褐色。66、67、68は直線的な体部のもの。調整はヨコナデである。褐色～黄褐色を呈す。68がやや高めの高台であり、後出的なものと考えている。69、70は高台の開き具合があまいもので、色調は暗茶色～暗褐色を呈す。時期は、63、68～70は10世紀代、他は9世紀中葉と考えている。

50、71～74は土師器皿である。50は小皿に近いわりには、器高が高い。調整はヨコナデであり、底部にヘラ切り離しの痕跡が顕著に残る。色調は明褐色～暗黄褐色。71は底径が124mmとやや大きめであり、体部も内湾気味に立ち上がる。内外面ヨコナデで、色調は暗褐色。72、73は同様なタイプであり、底径が110mm前後を測る。内外面ヨコナデで、色調は茶褐色～明黄褐色を呈す。時期については、50は9世紀初め～中葉、72～74は9世紀中葉～後葉と9世紀代におさまるものと考えている。

75、76は須恵器蓋である。75は天井部が平坦で、口縁端部の接地面がシャープに仕上げられている。外面回転ヘラケズリ、内面ナデ調整である。色調は灰白色。77は全体的にシャープさに欠ける。外面回転ヘラケズリ、内面ナデ調整である。色調は灰白色。77は須恵器高台付坏で、体部は丸みを持ち、高台もやや丸みを持つ。外面回転ヘラケズリ、内面ナデ調整である。色調は灰白色。78は須



第17図 包含層出土遺物実測図-10 (S=1/3)



第18図 包含層出土遺物実測図-11 (S=1/3)

器種名	土器番号	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	備考
甕	43	(7.3)	21.0		外黒色 内褐色	微砂粒多く含む	良好	反転
甕	44	(9.2)	24.4		暗茶色	砂粒多し	やや不良	反転
甕	45	(5.0)	26.7		暗茶色	砂粒多し	良	反転
—	46				暗茶色	砂粒含む	良	
土師器椀	47	3.8	13.8	7.0	明茶褐色	砂粒多し	良好	反転
土師器椀	48	3.8	12.6	6.0	明褐色	砂粒多し	良	反転
土師器椀	49	4.0	12.2	6.7	暗茶褐色	砂粒多し	良好	
土師器皿	50	2.1	10.2	6.9	明褐色～ 暗黃褐色	微砂粒若干含む	良好	
土師器椀	51	3.8	11.9	7.0	褐色	微砂粒含む	良好	反転
土師器椀	52	(2.7)		6.4	茶褐色	砂粒多し	良好	反転
土師器椀	53	3.6	11.3	5.8	茶褐色	雲母多く含む	良好	反転
土師器椀	54	4.0	11.8	7.0	茶褐色	微砂粒含む	良好	反転
土師器椀	55	(1.4)		7.3	明褐色	微砂粒若干含む	良好	反転
土師器椀	56	(1.8)		7.2	茶褐色	金雲母若干含む	良好	
土師器椀	57	(2.5)		8.0	黃褐色	金雲母若干含む	良	
土師器椀	58	(2.7)		6.5	明茶褐色	金雲母多く含む	良好	
土師器椀	59	(2.6)		5.7	茶褐色	微砂粒含む	良好	
土師器椀	60	(2.0)		6.5	茶褐色	微砂粒含む	良好	反転
土師器椀	61	(5.5)	17.2		外明褐色 内黒色	微砂粒若干含む	良好	反転
土師器椀	62	(2.0)		7.8	褐色	金雲母若干含む	良	外面外底に煤 反転
土師器椀	63	(2.5)		8.1	暗褐色	金雲母多く含む	良好	
土師器椀	64	(2.2)		8.0	暗褐色	微砂粒多し	良好	反転
土師器椀	65	6.3	13.0	8.3	褐色	微砂粒多し	良好	反転
土師器椀	66	(4.7)		8.3	褐色	微砂粒含む	良好	
土師器椀	67	3.0		7.7	淡黃白色	微砂粒若干含む	良	反転
土師器椀	68	(2.9)		8.5	淡黃褐色	金雲母含む	良好	
土師器椀	69	(3.0)		6.4	暗茶色	微砂粒若干含む	良	反転
土師器椀	70	(3.2)			暗褐色	金雲母多く含む	良好	
土師器皿	71	2.0	15.5	12.2	暗褐色	微砂粒含む	良好	反転
土師器皿	72	1.6	14.2	11.0	明黃褐色	砂粒多し	良好	反転
土師器皿	73	1.7	13.8	10.5	明茶褐色	砂粒若干含む	良好	反転
土師器皿	74	(1.6)		9.2	褐色	微砂粒多し	良	反転
須恵器蓋	75	(2.2)	12.8		暗灰色	微砂粒若干含む	良好	全体に自然釉 反転
須恵器蓋	76	(1.8)			灰白色	砂粒多し	良好	反転
須恵器杯	77	3.7	12.2	8.8	暗灰色	砂粒含む	良好(堅綴)	反転
須恵器瓶	78	(4.8)			暗灰色	微砂粒多く含む	良好	反転
青磁	79	(2.0)		7.7				反転
青磁	80	(3.0)			小豆色			深緑の釉 反転
青磁	81	(3.5)			淡茶色	微砂粒若干含む		内外面 透明の釉

土器計測表 - 2

恵器長頸瓶の頸部であろう。色調は灰白色を呈す。時期については、すべて10世紀代と考えている。

79～81は磁器である。79は青磁の底部片。内外面胴部下位は裸体で、下位以上と高台接地部分のみ釉を施す。80は越州窯青磁で、蛇の目高台を有する。器壁が分厚く、径については、確証はない。胎土は小豆色で、深緑の釉をかける。また、外面胴下部から高台にかけては裸胎のままである。内面には重ね焼きの痕跡が残る。81は青磁口縁部の破片資料である。淡緑色の釉をかける。共に時期は10世紀代と考えているが、80の越州窯は後出的なものである。

小 結

包含層より出土した平安期の遺物については、土師器の椀が大半を占めている。器形の明白なもの、および、計測によりその全容が把握できるものの数は少ないが、口縁部径125mm、底部径70mm、器高450mm前後（第2表参照）を測るものが多く、概ね9世紀中頃～後半の時期に位置付けられるものと考えている。

遺物の中では、特記すべきものとして押印の痕跡がある土器が挙げられる。押印土器については、土師器高台付椀であり、土器焼成前に印を押したものであった。印自体は3cm角の角印と考えられるが、破片のため、印字は判読できない。私印ととらえるべきかは言及をさけるが、同時に出土した土器に墨書も認められ、公的施設の存在も否定できないであろう。

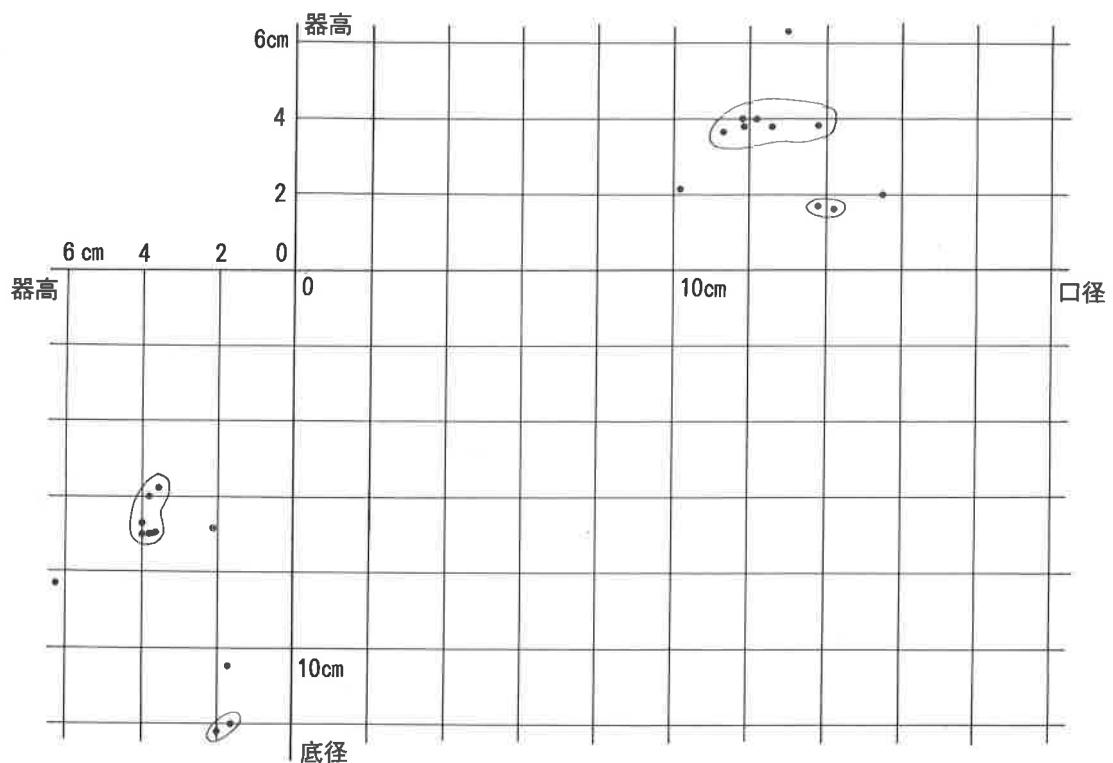


表-2 出土土器 法量

VI. 大早田地区の試掘

1. 調査の概要

波呂地区農業用貯水池の建設予定地であり、福岡県農林事務所からの届け出を受けて、平成2年度に試掘調査を実施した。

調査はバックホーを使い、表土除去、遺構確認を行った。結果的には地山までは達せず、途中、湧水が酷くなつたため、遺構面の確認までは至らなかつた。調査では、弥生中期の土器片が数点出土したのみであった。

2. 出土土器（第20図）

調査時に出土した土器は、碎片ばかりであり、図化したのは2点のみである。

1は甕口縁部片である。「逆L字」状の口縁を呈し、口縁下に三角凸帯を付す。また、外面に煤が付着している。調整は、外面ハケ、内面ナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗黄白色、焼成は良好である。時期は中期後半代であろう。2は甕底部片である。所謂「城の越」式の直後のもので、上げ底となる。外面底部は丁寧に指オサエで整形し、体部以上はハケ調整、内面は丁寧にナデを施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗黄白色、焼成は良好である。弥生中期前半であろう。



第20図 出土遺物実測図 (S=1/3)



第21図 周辺地形図 (S=1/2,500)

V. おわりに

1.まとめ

本調査で明かになった事を要約すると以下のとおりである。

- ① 確認された遺構は、掘立柱建物2棟分と考えられる、柱穴状ピット群である。時期については、9世紀末～10世紀代と考えられるが、調査面積が狭少のため、遺跡の全容は判断できない。しかしながら、後世である室町期には、幕府との強い関わりをもつ竜国寺が建立されており、9世紀末の段階に何らかの前進的な遺構があった可能性はある。
- ② 平安期の遺物については、小結の項に記しているが、押印のある土器や墨書き土器などが出土しており、今後の調査に期待がもてる。
- ③ 弥生期の遺物についても小結の項に記しているが、比較的良好な土器が出土しているため、調査区外へ遺構が展開する事が想定できる。町内の弥生後期の遺跡については、近年の調査によつて、大方、判明しつつあるので、位置的関係や拠点集落との関連などが、今後の研究の課題と言える。

2. おわりに

本書記載の早田遺跡は、台風という天災によって、偶然発見された遺跡である。その取り扱いについては、協議段階から再三、考えさせられた遺跡ではあるが、町での文化財行政の難しさ、また、保護思想育成の重要性等について再認識させられた遺跡と言え、こうして報告する機会を得られた事に対して、各方面で御助力して頂いた関係者の方に感謝したい。内容的には、執筆者の不学が目立ち、まとまりのないものであります、今後、諸学兄の御指導、御助言を仰ぐ次第である。また、最後に発見の通報して頂き、調査での協議で文化財保護に対するご理解を頂いた、福岡県農林事務所の関係者の方々にお礼申し上げ、本書のおわりとしたい。

図 版



a. 調査前 (崩壊面)



b. 同上 (近景)



a. 遺物出土状況



b. 同上 (乗り面 下)



a. 遺跡全景（調査後南側より）



b. 同上（調査後北側より）



a. 北側土層



b. 同上 (近景)



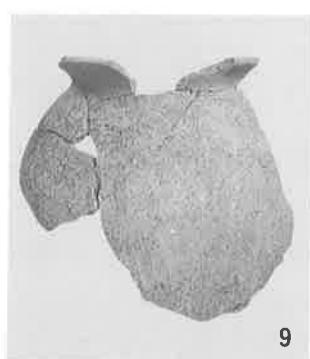
3



7



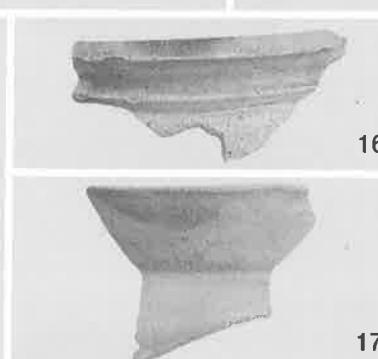
8



9



12



16



17

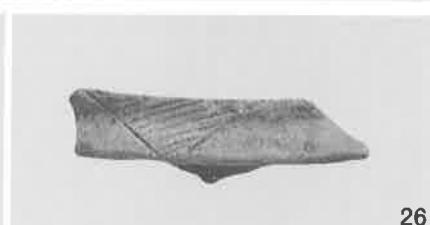
18



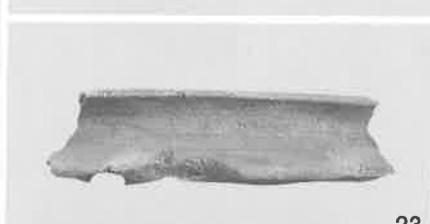
19



22



26



23



27

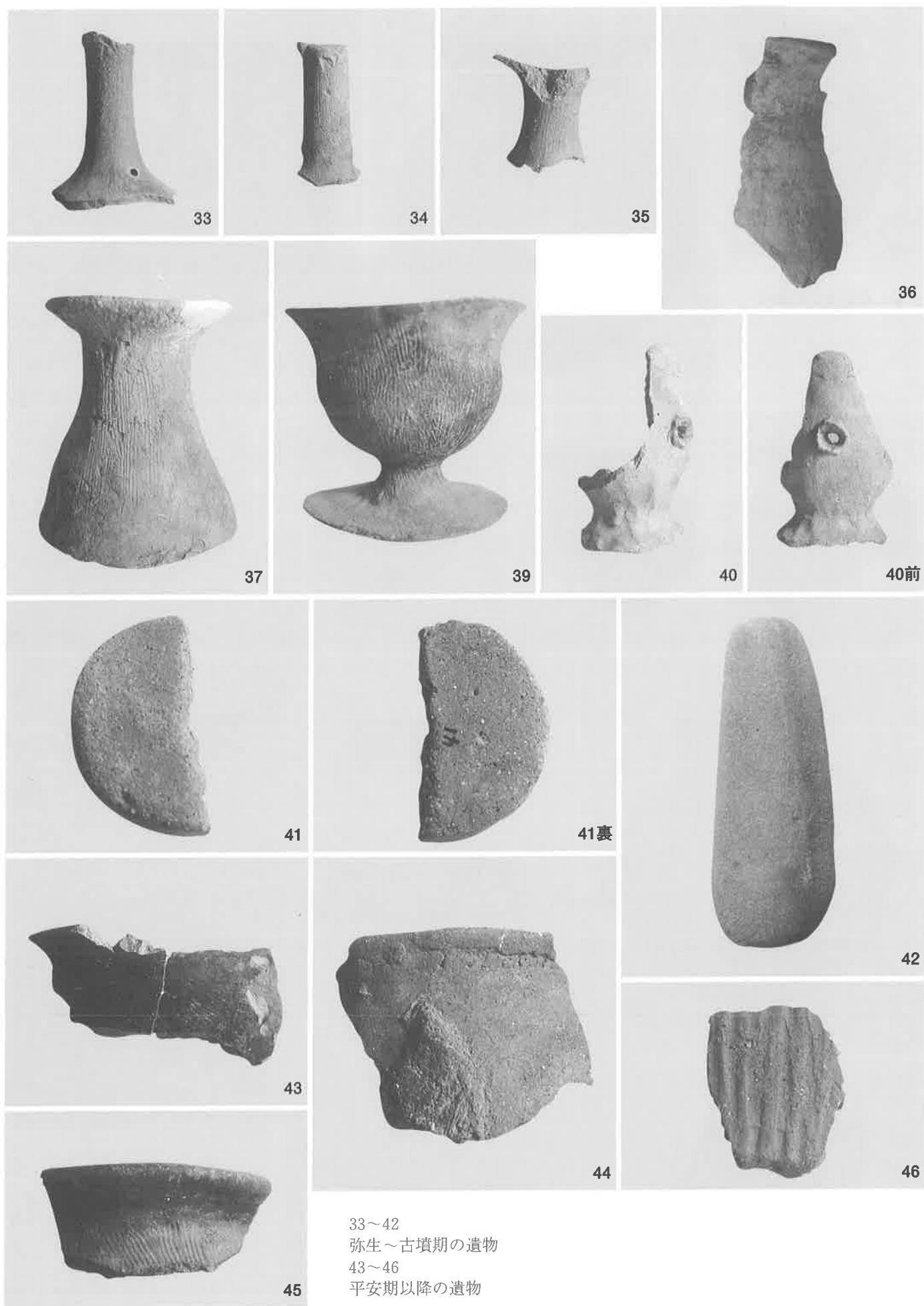


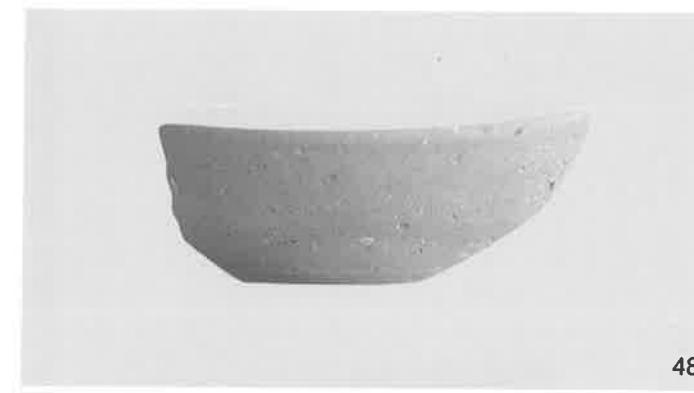
28



30

7～30
弥生～古墳期の遺物





48



50



49



55



53



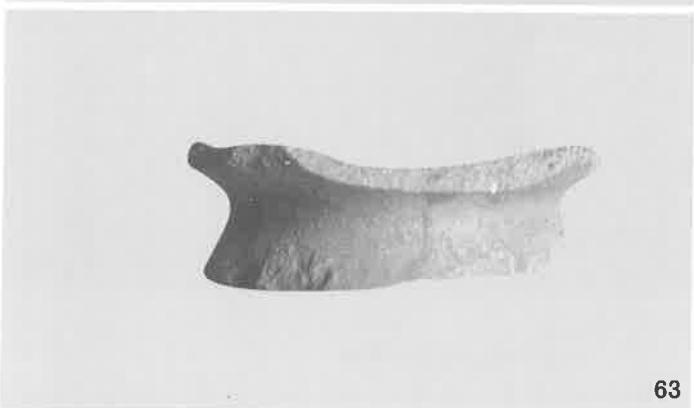
61



54

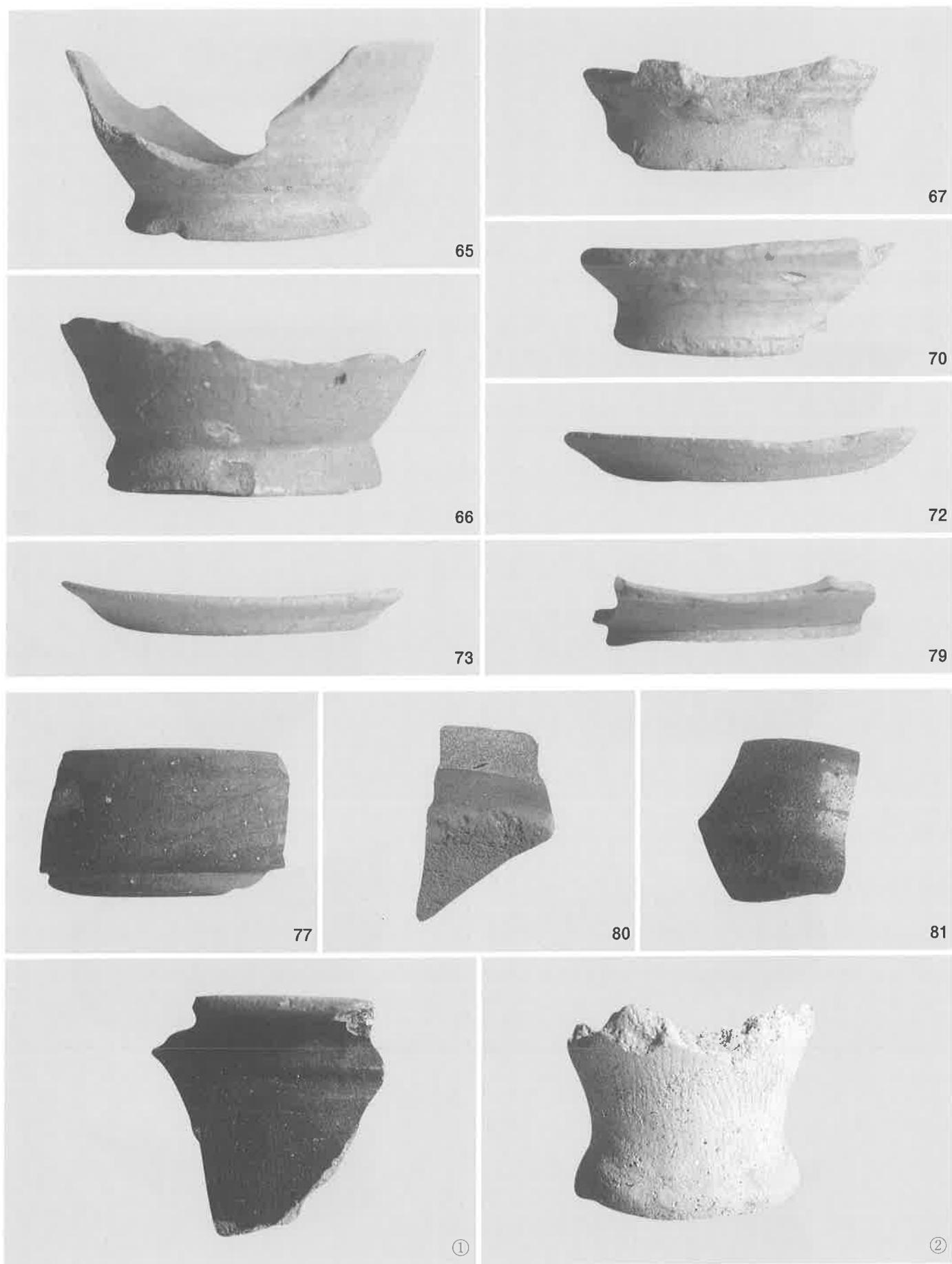


62



63

48~63
平安期以降の遺物

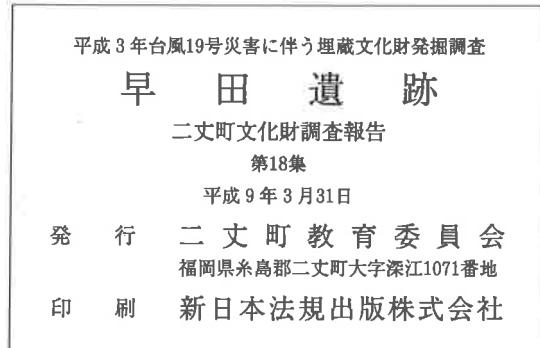


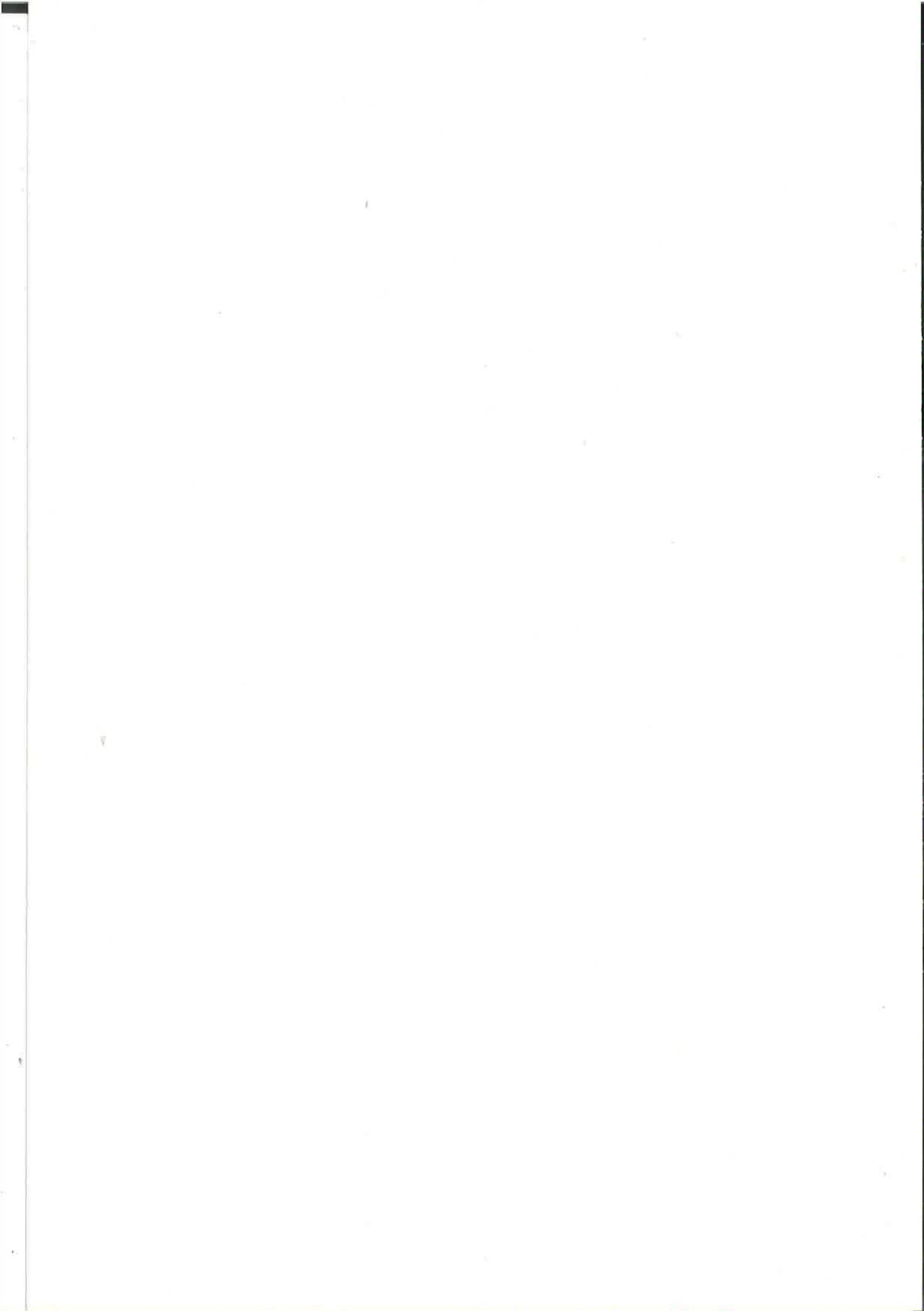
65~81
平安期以降の遺物

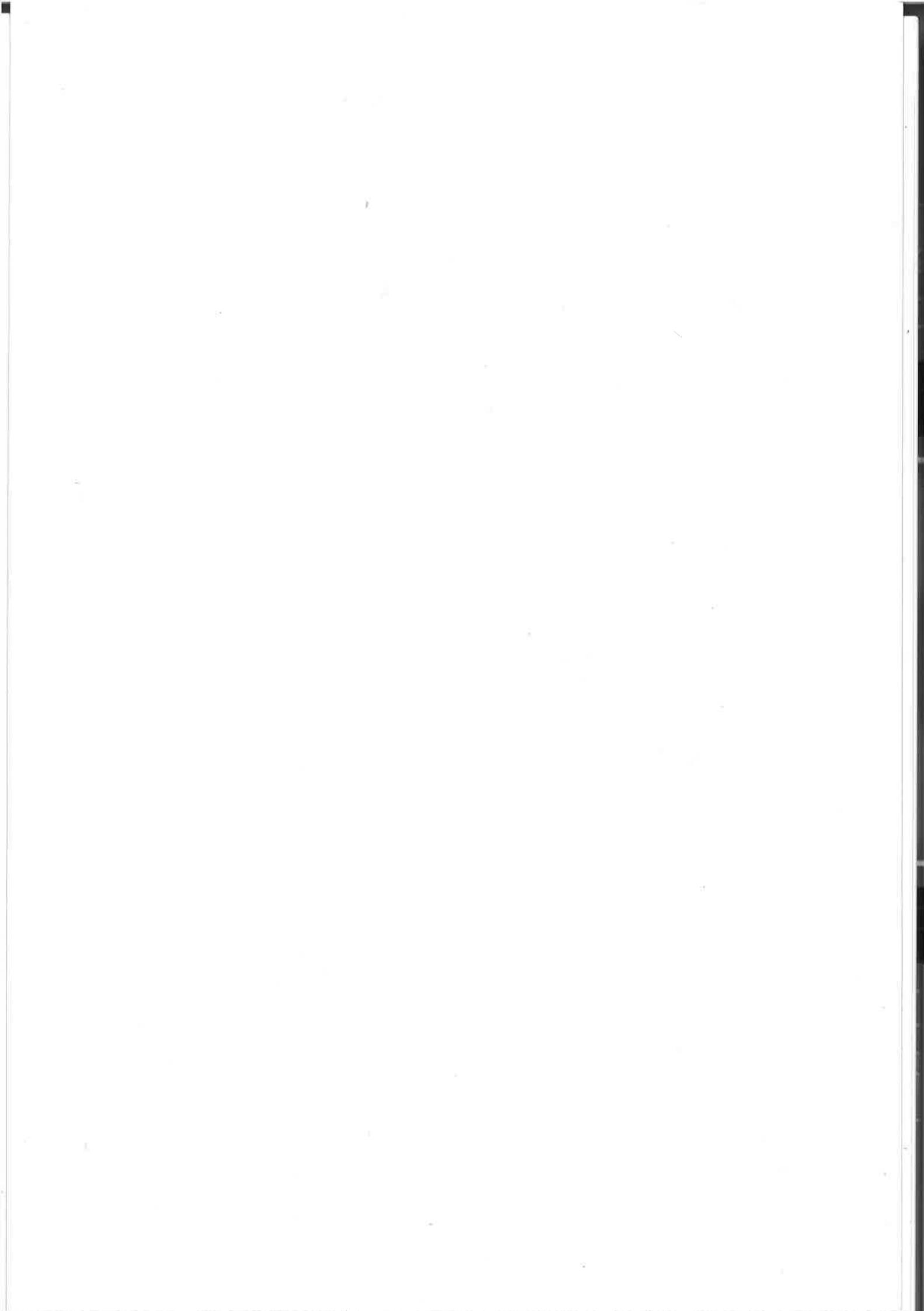
①・② 大早田地区出土の遺物

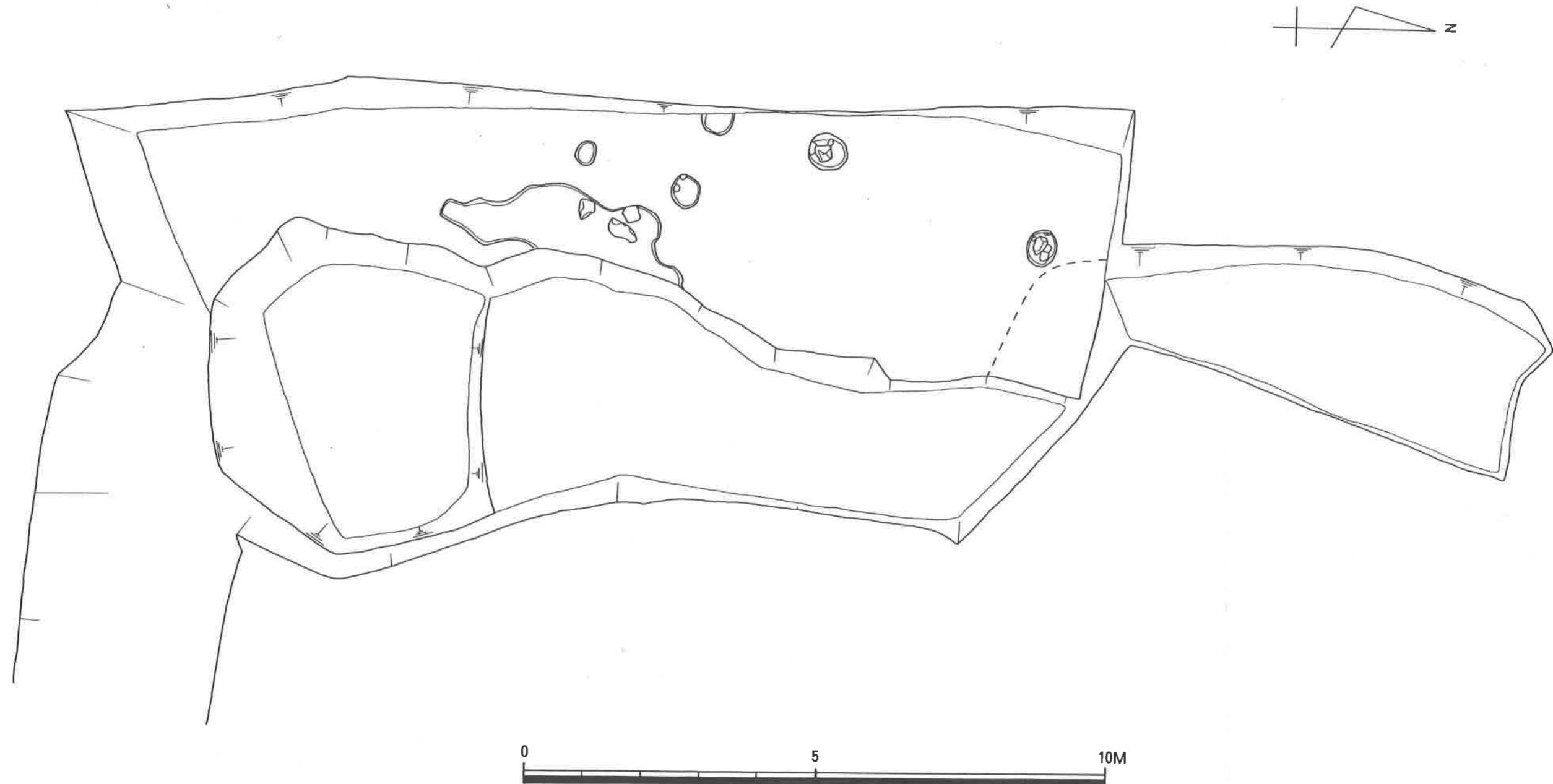
報告書抄録

ふりがな	そうだいせき							
書名	早田遺跡							
副書名	平成3年台風19号災害に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	二丈町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編集者名	古川秀幸							
編集機関	二丈町教育委員会							
所在地	〒819-16 福岡県糸島郡二丈町大字深江1071 TEL (092)325-1111							
発行年月日	1997年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
早田	福岡県糸島郡二丈町大字波呂字早田	40462		33° 30' 21"	130° 10' 43"	19910925 ~ 19910927	50	平成3年台風19号災害復旧
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
早田	建物 包含層	弥生 ~ 平安	柱穴状ピット	弥生土器 土師器 石器				









遺跡全体図 (S = 1/80)